おむにばす

OMNIBUS

第7号

『特集』

艦これローション

DOJIN R18 成人向け

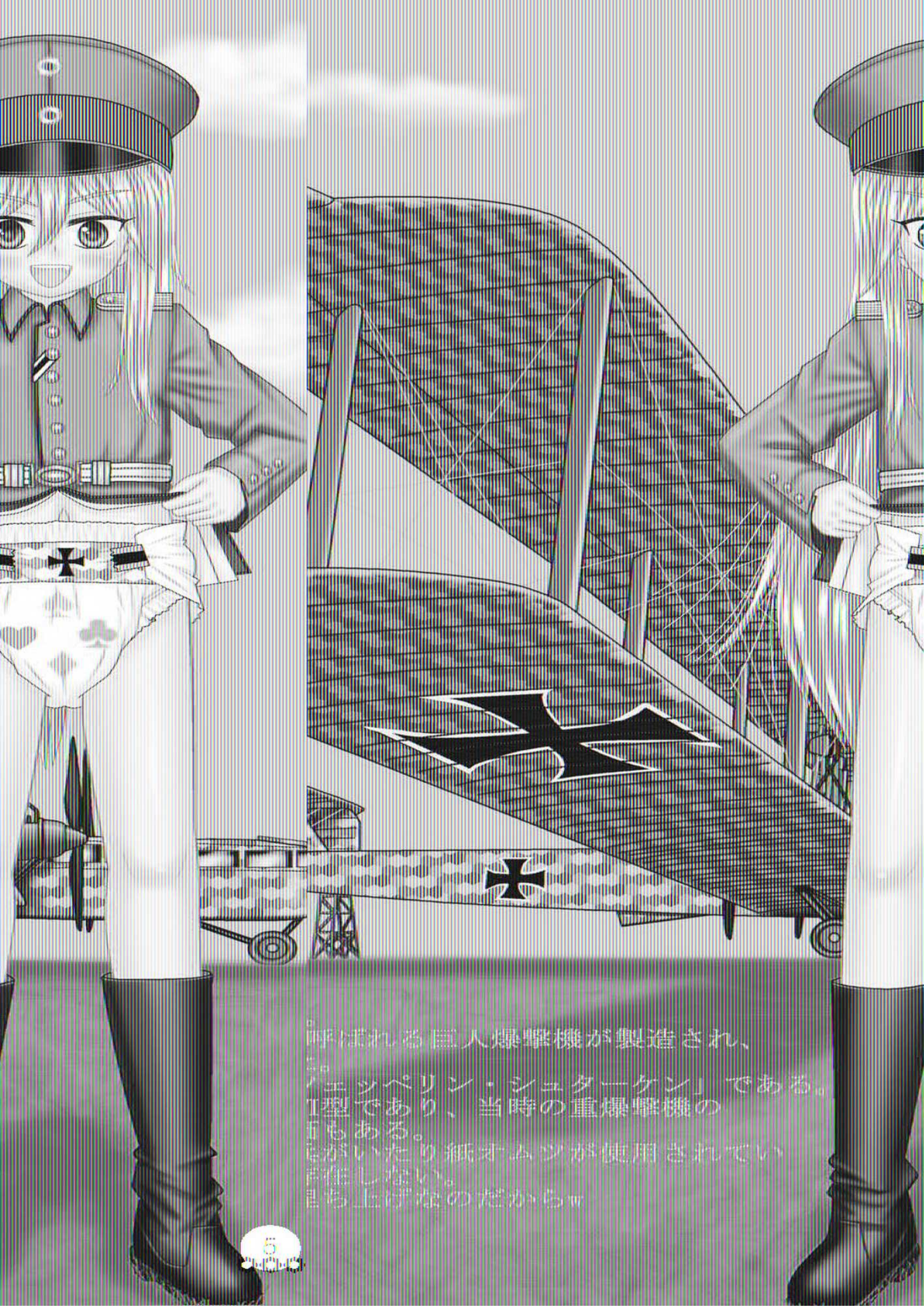
18歳未満の購入・閲覧禁止

布と紙（サークル）

おむにばす 第7号 特集 艦これローション

AZE
SHIMAK

椛を引き受けた文ちゃん
一度射精を見てみたかったんですよね～
チュポッ！
喘いじゃって可愛い♪
ジュッ！ジュッ！
そろそろかな～？
あ～！
ありゃ、おしっこ？
プシャ～！
よく考えたら精液が出るはずないですね失敗失敗ｗｗ



『呼ばれる量人爆撃機が製造され、
その
「ユンカーズ・シュターケン」である。
1型であり、当時の重爆撃機の
Tもある。
多くの爆弾搭載スペースが使用されて
いる。
『ミュンヘンの空から』

目次

3 星月 はずむ
4 画：sei
原案：シュージ
5 時の艦の艦長
6 ストラス
7 目次
8 ゆからんのすけ
9 たいとにゃん
11 やまぶきいろ
13 乙原 ゆゆゆ
17 三日月 諸羽
25 にっしっし
29 わんびぃ
31 アキサ
32 皆瀬 たまき
33 鴉宮 冷麺
34 瑞光ちのん
35 カプリン
36 ビアード
44 小説：遠野 渚
挿絵：中村 あぞ
51 小説：黒人形
挿絵：みこみみねこ
59 Dr.Jazz
64 藤乃 さくら
71 ぺるちぇ
78 伏屋 のづ
85 藤
92 平野 月子
99 あとがき
102 おくづけ

表紙 Kanchela

「二三式応急帯」
吸収体を内蔵し、浸水を速やかに止める効果を期待された
しかし損傷に極めて弱く、水を含みすぎてしまう欠点があったため改良された
（改良版は通称『水遊び用』）

何ですか？！
この天使達は？！
いや朝起きたら二人とも縮んでて…
ゼガー
とってもキュートネー
はいお姉さま
これあげるないだ3
たまぬいてあります

もしお姉さまも縮んだら

……

新しい装備ができたぞ！電！

本当なのですか!? 提督!!

新装備なのです。
by やまぶきいろ

ピロ～ン

おもらし用おむつ

さぁっ これだ!!

へー… ってなんですか これわ～～～っ!?

ええい!! つべこべ言わずに 装備したまえ!!

はわわわ～っ!?

バ～ン♥

はっ恥ずかしいのですっ!! 一体これなんの意味がっ!?

はわわ～っ

落ち着け電…

フッ…

そうっ!!
これがこの
装備(おむつ)の!!
特別な!!
能力!!

バーン

ふにゃあああああっ!?

ビクンッ

装着者の!!
女の子を!!
強制的に!!
おもらしさせるッ!!

じょわーっ♡

よしっ戦術的勝利!!

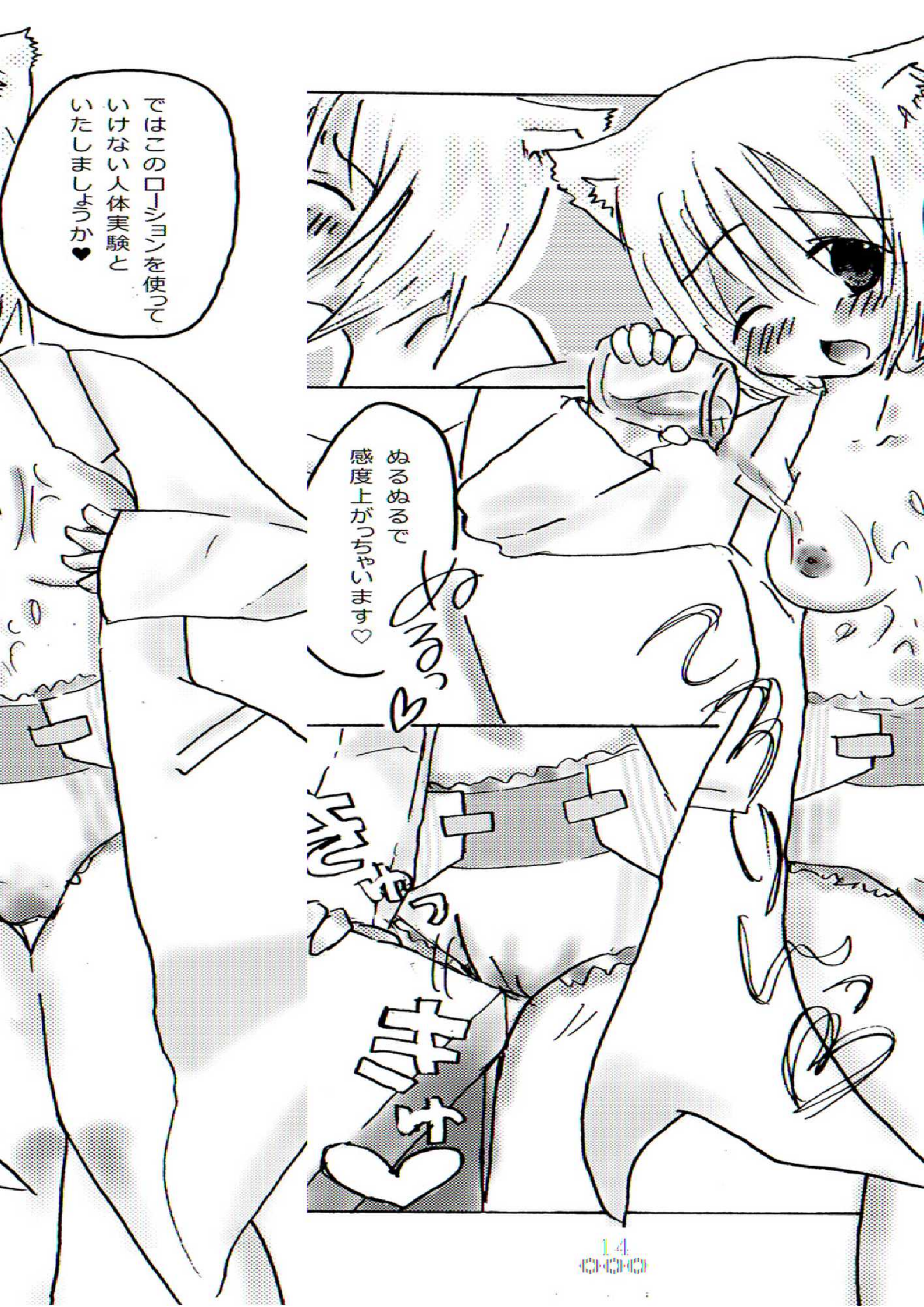
グッ!!

なんの勝利ですかぁっ!!

ピーッ

おしまいなのです。

こんにちは
羽野井と申します
ただの化学教師です
はのいせ
~みつの!? じっけん
これには高吸水性高分子が
用いられています
私物です
そのうちの一種
ポリアクリル酸ナトリウム
カチャカチャ
さて 皆様おなじみの
紙おむつ
~せと
乙原ゆゆゆ


ではこのローションを使っていけない人体実験といたしましょうか❤
ぬるぬるで感度上がっちゃいます♡
ぬるっ♡
ぬるぬる
ぬちゃ

んふっ♡
おむつ越しだと
強く押し付けなきゃです♡
ぬりぬっ
あんまっ
いっちゃう♥♥
ぴくっ
ひぁぁ・・・・♡
あっ♥
おひっこ・・・
おひっこれちゃうぅぅ♥♥

ぽたたっ…

はっ…
あらら…

ぺたっ
もあっ

ぽわーん

あっ!?
えっ!?

ふう…

コンコン
羽野井先生—
とうきの授業の質問が—

おむつの国からこんにちは

三日月諸羽
andきいたん

あ。いらっしゃいませ～！

玲衣ちゃ～ん。双葉くん、来たよ～

ニヨ

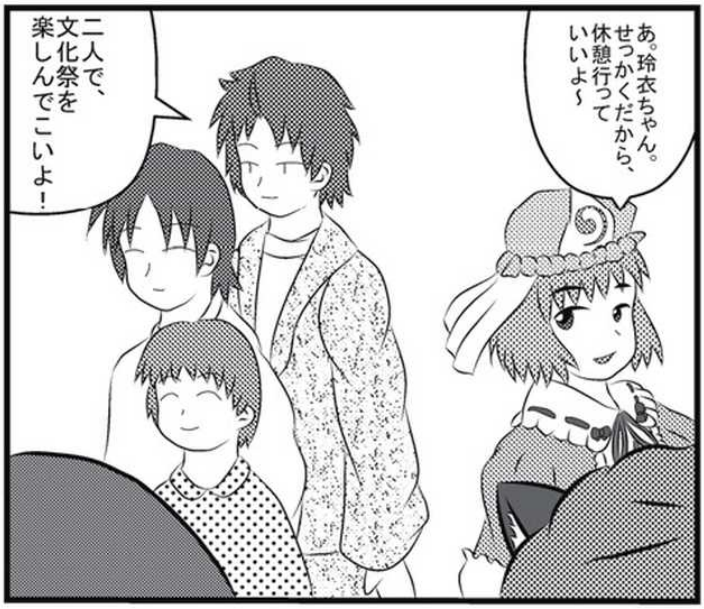
いらっしゃ～い。双葉くん。四名だね～。今、席に案内するよ

お～スゴイなぁ

ありがとう

ごちそうさまでした～

さてと。あまり長居はいけませんね。そろそろ違うパビリオン観に行きましょう。あ。柊くんはもう少し大宮さんと一緒にいてあげてください。
え？


あ。玲衣ちゃん。せっかくだから、休憩行っていいよ～
二人で、文化祭を楽しんでこいよ！

ええー！

は、はぁ…。って

なんか、ごめんなさい。先生が勝手なこと言って…

気にしないでよ。私も、ずっとウェイトレスやってたから他のパビリオン観れなくて、ちょっとイヤになってたんだ～

ねぇ。アレ食べようよ。美味しいって矩香ちゃんが言ってずっと食べたかったんだ～

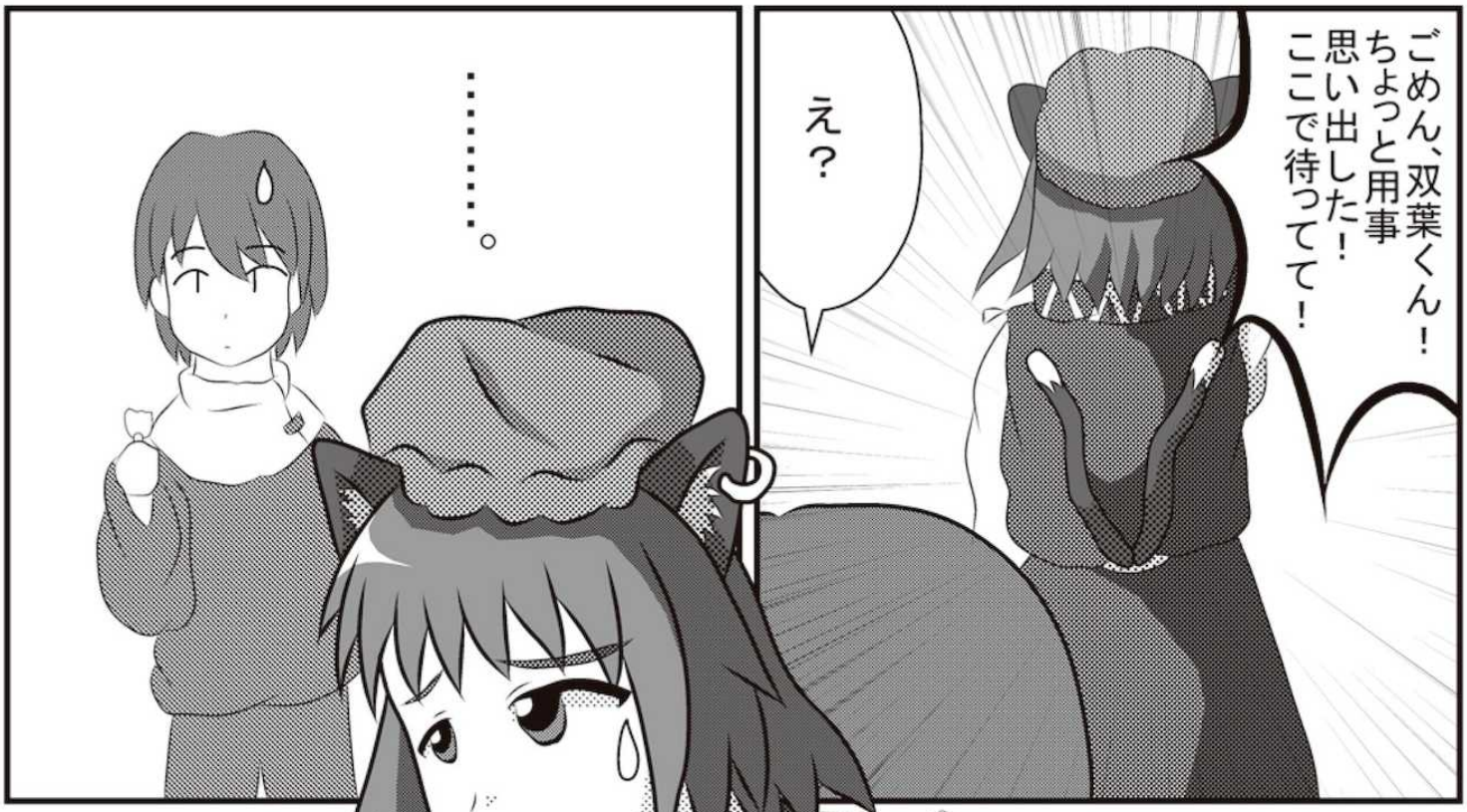
美味しい…

良かった～。嫌いな人もいるからね～。アメリカンホットドッグ

三日月諸羽は嫌いです。

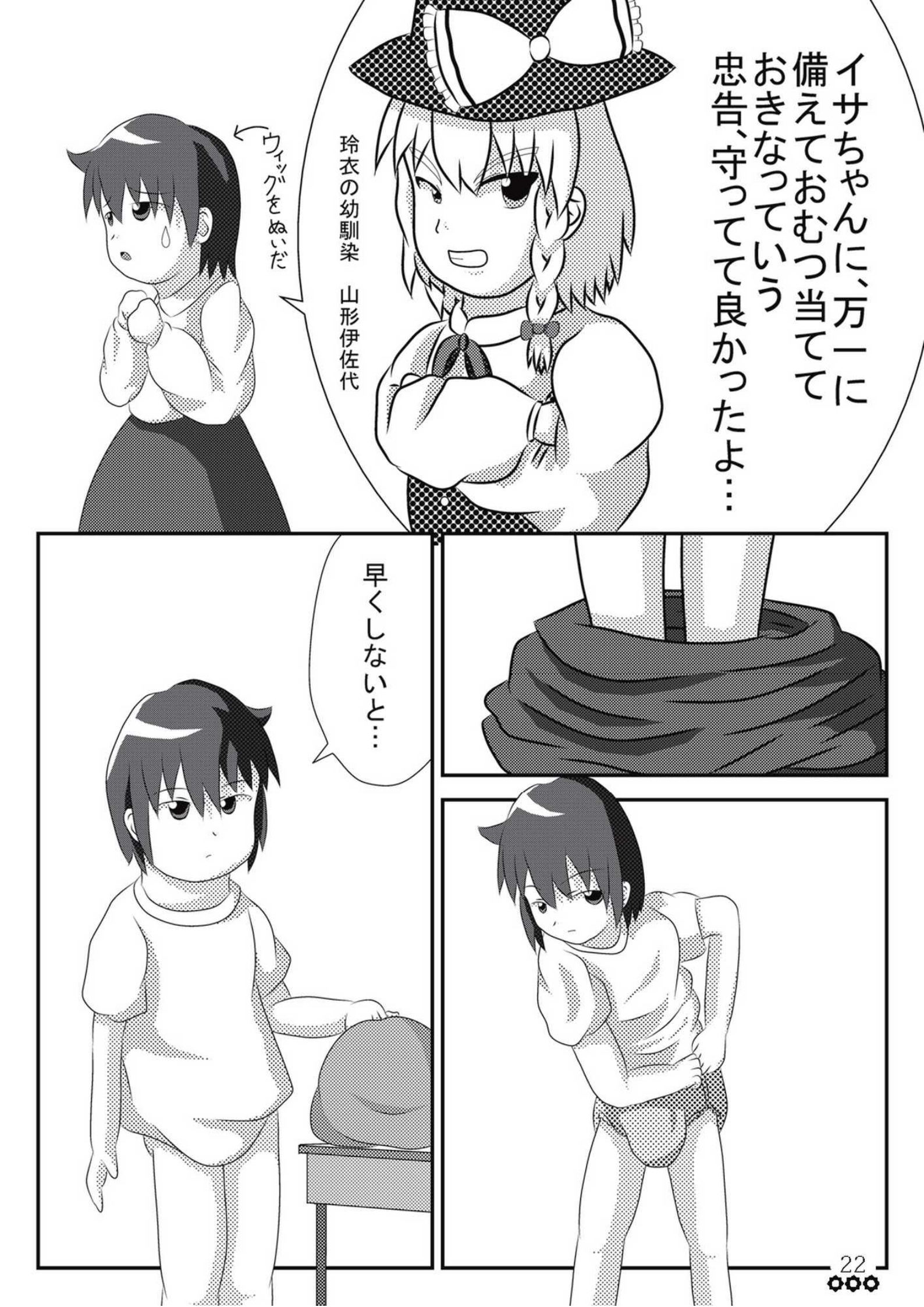
何か、デートみたいだな…

ああっ！



四館
女子更衣室

危なかった…。
もう少しで
漏れちゃう
ところだったよ…


イサちゃんに、万一に備えておむつ当ててておきなっていう忠告、守ってて良かったよ…
玲衣の幼馴染　山形伊佐代
ウィッグをぬいだ
早くしないと…

よし。
これでＯＫ

さ。
早く橙に
戻らないとね～

終

じゃ、どこ行く～？
お兄ちゃんのトコは
劇やってるけど

劇ですか。
いいですね～。
行きましょう

ふぁっ!?

椛ー!!
おむつ
はいてみない!?
かいたひと：にっしっし

おむつは良いよぉ
トイレ行く暇も
省けるし
色々と
捗るよぉ
そ、
そうなん
ですか…?

まあ
無理にとは
言わないけど
ささ、
とりあえず
受け取って❤

・・・
うーん…
気が向いたら
はいてみます…
やった♪

そわ
そわ
おむつを着けてお仕事か…
ぴらっ

今日も異常なし…
…

激しく動かないし見えることも無いよね…
冬はあったかくていいかも…

これでトイレに行かなくていい訳だけど
このままするのもちょっと勇気がいるなぁ…

そわ
うーん…
ちょっと我慢し過ぎたかも…
そわ

うーん…
うーん…
あっ 椛はっけーん♪

おむつ着けてくれたかな？
ちょっと声かけてみよっと
ぱんつとかの換えは無いしこぼれたらどうしよう…

ぴくっ！
ヌッ！
やっほー ごきげんいかが？
ひえっ!?

あっ！おむつしてくれたんだ♪
すてんっ

あっ
ひくっ
じゅわっ

あっ…漏れちゃ…っ

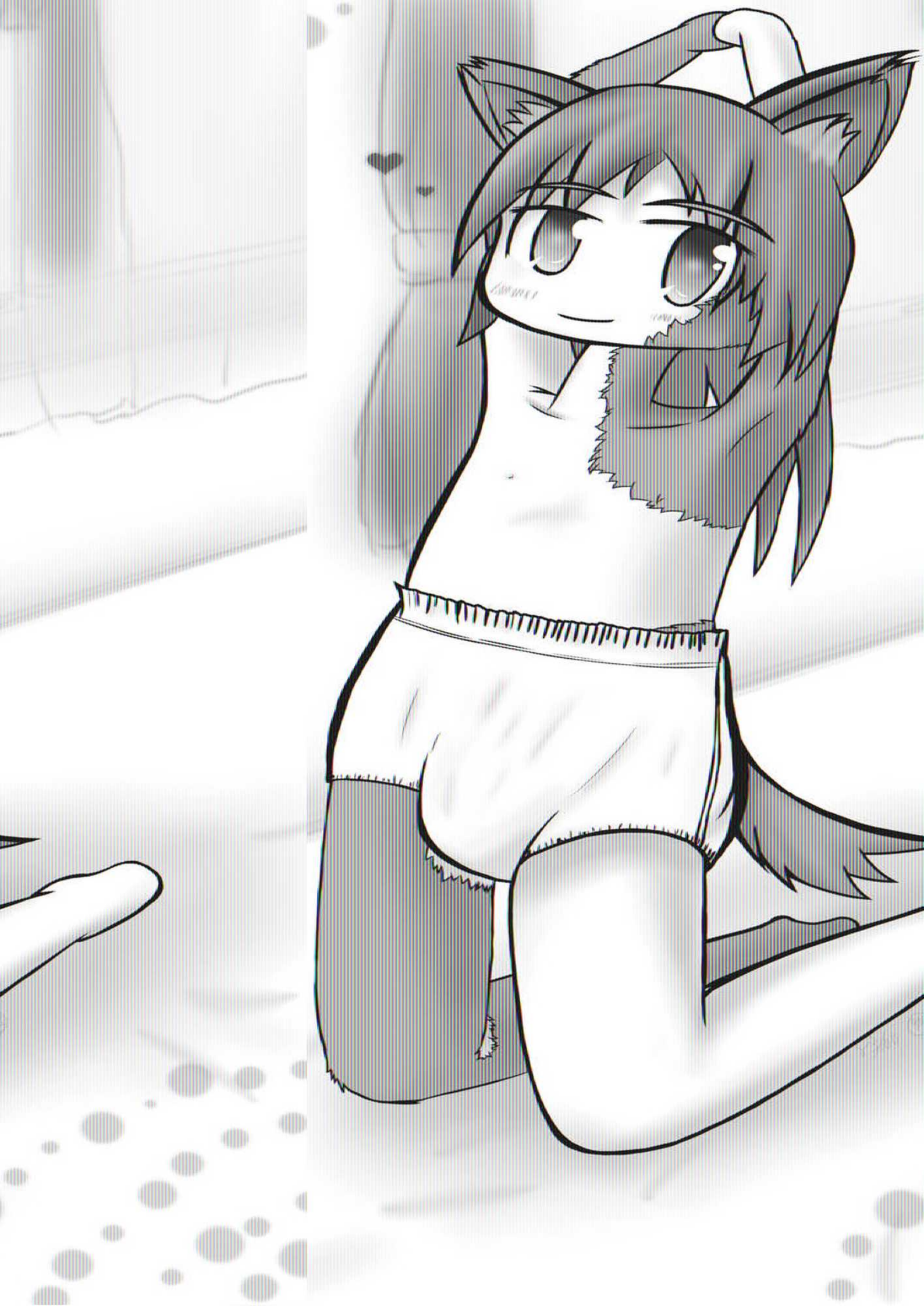
あら?!
さっきの拍子で
漏らしちゃったのね❤

じょわわわわ…

ああっ
おもらし見られてる…
でもなんだろう
この感じ…

くなった多摩ちゃん。
猫耳しっぽとプリントおむつがとても可愛らしい
提督の欲求を毎日満たしてくれる
優秀なこねこちゃんです♥

ぬいぐるみで気持ちよくなった
球磨ちゃん
布おむつを開くと、
そこにはいつもと違った
ぬめぬめがありました



水道水
あべべ
ポンプ
で
つが
るる件
一の解決法なんだけど
水をローションにしたら吸わせんなんじゃ…
業務用ローション20Lポリタンおとな買
ぬめぬめし
スルっと
スベッと
まいあがれ
をんもうで
あまれる
…ふんあるい

きょうも
ぬるぬるであそぼ…

人は様々な理由で傷つき、そして他人を恨む生き物。

時として人は、私達の想像も付かない理由で他人を恨むこともある。

だれもが、私は誰かに恨まれるような生き方をした覚えはない。

だから恨まれて……最後の無い言葉とともに思っていた。

「知ってる？　最近、おばけを嫌いな女の子のおばけが出るらしいの！」

「何それ。おばけがおばけを怖がるわけないじゃない。なのに、なんでおばけを嫌うのよ？」

「それはきっとおばけが、おばけに憑かれた霊媒師によって生まれた存在だからなんだって」

私は、親知らぬ友達の囁く話に目を丸

それを神やかれ、屈辱を負った少女達の霊が集まって生まれたらしい。

ものたち、おばけとは無縁にする人々にその恨みを晴らすため、夜な夜なトイレへ行こうとする人間を驚かせては、同じ屈辱を与えるという。

「よくあんな下らない話、覚えていたものね」

「あら、信じてないの？　それとも、もしかしておばけが怖かったりして」

「そ、そんなんじゃないわよ！」

友達は意地悪く笑った。

本当はバレているのだろうが、私はあくまでも意地を張り、怖がっていない演技を続けた。

「ばいば

おばけで夜はおばけを嫌いと言ってるとが難

繋がりけられた。

しかし、最近になってようやくおねしょ癖も直り、ここのところおばけが現れることも無くなった。

だが、母はベッドを濡れるのが不快、おばけを取るのを認めない。

そのせいで妹は、おねしょ癖が直ったあとも、毎晩おばけを続けている。

彼女の肩は、まるでおばけという脚に囚われたかのように、毎晩その白い無数の中へ閉じ込められ、普通の下着を穿いたという自由を剥奪されたのだ。

本人は嫌がってもいるが、どうしたらおばけ脱ぎ、母何度も駄得した。

その結果、一週間おねしょをしなければ

「それはもーだよ！　だってく今日もうおばけ嫌だもん！」

妹は私と2つ違いの年齢。

だけれど、あの事件から4年経ったいまでもしょぼくれている。

母親ら

母親ら

母親ら

トイレに行くもん！」

妹はとても楽しそうだったが、私は量間の友達の話が気になって話も聞かなかった。だけれど、妹にお化けを怖がっているなんて知られたくもない。

だから私は、なるべく妹と顔を合わせないように、黙々と勉強ばかりに勤しんだ。

明けない夜は無いというが、それは逆に言えば日の沈まない朝も無いということだ。

この日も例外なく、夜は訪れた。

妹は量間の言葉通り、寝る前にトイレを済ませたようだ。

しかし私は、トイレに行くことができなかった……。

恥ずかしいことに、友達の話が怖くてトイレに入ろ、いつも夜は通れず。

「おねーちゃん、おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

私達はいつも通り、二人で寝床に入り、挨拶を交わす。

そして私は無理矢理目を瞑り、なるべく何も考えないようにした。

それからどれほどの時間が経ったかは、私はベッドに埋めていた顔を外へ出し、辺りを見渡す。

すると視界一面に夜の闇が広がった。

闇は現世から私の心へ入り込み、私は言い様の無い不安に駆られる。

もしこの闇の先に、幽霊が待ちうけるような化け物が潜んでいたら……

そう考えると私は、このベッドから外には出られない。

私と妹の部屋は共同で、中には勉強机と小さな本棚、それと、やっとあるのベッドが一個置かれている。

私達姉妹は毎晩、二人でこの一つのベッドで寝ている。

そしてある夜が、私の最後の夜だった……。

「量様に相談して、おねしょするんじゃないよ」

「えへへ、大丈夫だよ、ちゃんと寝る前にはトイレに行くもん！」

妹はとても楽しそうだったが、私は量間の友達の話が気になって話も聞かなかった。

だけれど、妹にお化けを怖がっているなんて知られたくもない。

だから私は、なるべく妹と顔を合わせないように、黙々と勉強ばかりに勤しんだ。

明けない夜は無いというが、それは逆に言えば日の沈まない朝も無いということだ。

この日も例外なく、夜は訪れた。

妹は量間の言葉通り、寝る前にトイレを済ませたようだ。

しかし私は、トイレに行くことができなかった……。

恥ずかしいことに、友達の話が怖くてトイレに入ろ、いつも夜は通れず。

「おねーちゃん、おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

私達はいつも通り、二人で寝床に入り、挨拶を交わす。

そして私は無理矢理目を瞑り、なるべく何も考えないようにした。

それからどれほどの時間が経ったかは、私はベッドに埋めていた顔を外へ出し、辺りを見渡す。

すると視界一面に夜の闇が広がった。

闇は現世から私の心へ入り込み、私は言い様の無い不安に駆られる。

もしこの闇の先に、幽霊が待ちうけるような化け物が潜んでいたら……

そう考えると私は、このベッドから外には出られない。

この状態が続くことを願った。

すると、どのくらい……確かに、少しばかり眠が経ったのだ。

しかし、結局はそれだけ……私の眠が言葉によって完全に消滅することはなかった。

少し時間が経てば、おしっこでイッパイになった膀胱のことも頭がイッパイになる。

「もう……ダメ……」

私はもっとベッドの淵へ手を伸ばす。

私には行かなくてはならない場所がある。

他の誰かではダメ……だって、三蔵法師が西へ行かずして、一体誰が取経を行うというの？

私の膀胱に封じられた尿意は、まるで怪物のように暴れ回った。

彼をこの封印から解き放ち、暴行を種ませ

「うぅ……おしっこ……」

言葉には言霊という魂が宿るというが、だから言葉には不思議な力があるのだろう。

私は今の自分の状態を言霊に託すことで

に縛られて眠れない。

私はベッドから下ろしかけた足を、布団の中へ戻した。

やっぱり怖い……トイレに行くのが怖い。

でも、この手をトイレに行かなかったら……その先に待つ結末なんか分かきっている。

絶え間なく流れ続ける、この運命の流れ。

それを変えることができるなら、私は救われるのに。

私は泣きそうになるのを堪えながら、静かに寝返りを打った。

すると、今の私とは対照的に、穏に穏かな寝顔が目に映る。

そしてそれと同時に、私の頭には一つの事が浮かんだ。

ぼ、命懸けでもぶっ飛ばさないと駄目だ。

それなのに、私の手はその夢をおもわせられる。

あるうか？

動く胸が痛んだ。なぜ、痛いのは胸だけじゃない。

私の勝利は、もう既にあしらってやッパイになり、はちきれそうに痛い。

時の流れも運命も残酷だ。それらに抗すあるとは、私もまた残酷な決断をしなければならない。

私は掛け布団を静かに捲る。そして、無防ちょまそうに眠る妹の下半身に両手を伸ばす。

両手でしっかりと妹の寝間着のズボンを掴むと、それを静かにずり下ろした。

「うぅ……寒い寒い……」

寝惚け続けていたが、それを出すのはすぐ無防備が良かった。

しかし、同時にトイレではない場所で風いっきり用を足しているという無恥が残ない。

すると、ようやくトイレに行くことができた。

それは、一片の汚れもない、美しい純白の砂漠が広がっていた。

私は戦慄します、興奮のボルテージ最高潮に達しました。

そして次の瞬間には……あの砂漠に黄色いスコールが降り注いだ。

スコールの勢いは激しく、数分か砂漠全体をしてあるに関わらず、シュワッと言う激しい雨音を部屋中へ散らした。

「うぅ……寒い寒い……」

寝惚け続けていたが、それを出すのはすぐ無防備が良かった。

しかし、同時にトイレではない場所で風いっきり用を足しているという無恥が残ない。

私は慌てず、それからゆっくりとトイレを出た。

妹に気取られないように……それらしく時間稼ぎはすぎないように……

私は静かに妹の脇下から、おっぱい掴く。

寝惚けられはなるのだ。

それは私にしか成し得ない、天命。

だけれど私は怖かった。この感が見えない闇へ、足を下ろすのが……。

無間に友達から聞かされた怖い話が、脳裏

収し、終わらせてくれる。

しかし姉として……いや、それ以前に一人の人間として、どんなことが許されるのだろうか？

妹は今夜、何事もなく通りすぎたがそれ

「……」

あまりにも、私のおしっこは量が多すぎたようだ。

おむつが吸い取れる量の限界を超えたおしっこが、ベッドの上にはみ出して、見るからにもない島の地図を作った。

私はおしっこがぐしょぐしょになったおむつ、妹の下半身に巻わせた。

そして、まだズボンを穿き直さない。

これで、この粗相後で妹の仕業ということになるだろう。

私は脱ぎ捨てた下着とズボンを身に纏い、何もなかったかのようにして眠りについた。

しかしやはり、夜眠はできなかった。

朝。妹は妹泣き、妹はたたたたたんは

おむつをいらあの時、妹は泣き喜び強いられるハメになったのだ。

妹はなぜかちゃに謝り、書書えをした。

そんなやりとりを遠目で見ながら、私は朝食のパンをかじる。

酷く胸が痛んだ……だけど、真実を言う勇気はない。

私はそのまま学校へ行く支度を調えるべく、洗面所へ向かった。

「昨日の話の続きなんだけどさ。おむつのお化けを見たりして言うその話、詳しく聞いてもいたんだ」

「あれの話、続けるつもりなの？」

「当たり前だ。だって、おむつのお化けなんて他に聞いたことないもの。興味津々だ」

それを知った私の友達が、興味深げに言おうとしてくる。

おむつのお化けが現れたんだって。

もしかしたあの日の晩、トイレに行こうとしたらおむつのお化けが現れたんだって。

それにびっくりして漏らしたらしくて……

次の日は真くものにされたもよ」

興興興味しおむつをんにされた恨みってやつかな？」

「そうかな。おむつのお化けが出たり、他人のおむつを横取りしたりする人を恨んで、化けて出るんだよ」

あの話聞いたとき、私は昨晩の出来事が頭の中を浮かび上がった。

そして、心の中に大変な不安が襲う。

「どうしたの？　何だか、顔色いみたいだけど。」

お母さん全の時に、おねしょが不安だって言って、こっそりおむつを買ってきてくれた。

洗面は年棚が開いた。

私はおっと顔を浮かせ、思わずこんな眼下を掘り出す。

「う、うそ……おむつから漏れちゃってる

まう、

ションの低い妹が出迎えてくれた。
やはり、おむつ生活が辛いことが堪えているのだろう。
私は妹の顔を見ていると、昨晩のことを思い出して辛くなる。
真実を知れば、きっと妹は私を恨む……そう思うと怖かった。
だから、また顔を合わせないよう、勉強するフリをして夜まで過ごした。

複雑な胸中を抱えたまま、再び夜がやって来た。
私はこの日もトイレに行けなかった。
「おやすみ、お姉ーちゃん」
「うん、おやすみ……」
お互いに複雑な表情で、寝床に着いた。

眠っている間に違いないんだから……。
「ただいま」
「おかえり、お姉ーちゃん」
家に帰ると、昨日と打って変わってテン

また今日も、妹のおむつを使ってしまえばいい。
だけれど、そんなことをしたら私が漏らしのことは気にしなくて済む。
おむつのお世話は妹に押し付けられ続ける。
そんなの考えただけでも怖かった。
だけど、ベッドを濡らせば母に叱られる。
それもそれで怖い……。
悩み抜いた結果、私はベッドを出た。
お化けなんて怖くもない存在感溢れるなんて、ごまかしている。
「そんなものの為におねしょなんて、絶対してやるもんか」
私は廊下へ出ると、電灯のスイッチを入れた。
しかし、何故かスイッチを入れても電灯は点かない。
不安になればなるほど、私は何だかおしっこに行きたくなったような気がして……またもと眠れなかった。
ちらりと妹の方を見ると、もう既に寝息を立てており、夢の世界へ羽ばたいていた。

しかしその時、トイレの扉の前に誰かが立っているのが見えた。
それは見間違いではなく、確かに私と同じが居るのだ。
ここからその人物との距離はそう遠くない。
だから、ある程度の我慢はこれまでもしてきた。
背丈は私と同じぐらいで……何故か下はズボンもスカートも穿いていなかった。
代わりに、ふっくらとした膨らみを帯びたおむつがハッキリと見えている。
この家で、私と同じぐらいでおむつを穿いている人物と言えば、妹しかいない。
私は彼女へ向かって声を掛けた。
「あんた、そんなところで何してるの？ トイレなら、さっさと行ってきなさい」
彼女は何も言わなかった。
「あ、ちょっと！ 何とか言いなさいよ……あ、不安になるじゃない！」
それでも、向こうは何も言わない。

全く見知らぬ少女の腕がつかんだのである。

「おむつ……私のおむつ……何処……？」

少女は消え入りそうな声で呟いた。

逃げなくちゃ……頭ではそう思っているのに私の体はその場から動くことが出来ない。

「濡れてる……どうして……っ　私のおむつ……」

少女は静かにこちらへ歩み寄って来た。

いや……歩み寄るという表現は正しくないかも知れない。

だってその少女には……足がなかったのだから……。

「許せない……返して……私のおむつ……」

私はこの時、自らの足を濡らしていることに気付かなかった。

恐怖で硬直する私を見て、少女は微笑んだ。

そして私に向かって手を伸ばしてくる。

「いや……やめて……っ！」

少女の手が私に触れようとしたその時だった。

「だから、おねーちゃんに触らないで！」

驚いたことに、妹はおばけを説得しようとしている。

しかしおばけの方は無言で、何も言おうとはしない。

ただその視線が、私に突き刺さっているのを感じた。

私はその視線に耐えられず……妹に事実を話した。

「……違うの。私、許されないことをした。

昨日の夜、貴方はおねしょをしてなんかなかった！

あのおむつを濡らしたのは、私だったの！」

「……知ってたよ」

妹の意外な言葉に、私は次の言葉を見失った。

「だって、おしっこがおむつから漏れるくらい濡らしたはずなのに、私のズボンは濡れてなかった。

寝ている間にズボンだけ脱ぐなんておかし

妹の言葉に、再び私は戸惑う。

「そんな、私がおむつ履いてるのを馬鹿にした……

お父さんもお母さんも、おむつの取れない私に呆れてた……

でも、おねーちゃんだけは馬鹿にしなかった！

それが、すごく嬉しかった……だから、おねーちゃんのことが大好きなの！」

そう言うと、妹はおばけの方を向いた。

「お願い……私、おねーちゃんのこと恨んでなんかいないよ。

だから、おねーちゃんに悪さしないで！

私のおねーちゃんは、おむつのことを馬鹿になんかしない！

昨日のことだって、わざとやったわけじゃないの！

だからお願い……おねーちゃんを許してあげて！」

おばけは何も答えなかった。

おまけに私は、その郎下を胃ちの排泄物で汚してしまってた。
そんな私の姿に怒った母は、私に妹の間、おむつをして暮らすと命じた。
どうせもうれからは、私にも妹と同じ運命が訪れるまだ。
「おねーちゃん……」
「あはは、私もあんたと同じ運命を辿ることになっちゃったわね。
これからはずっ…私もおむつ仲間だからね
さ…よろしくね」
何年よろしくなのかは、自分でもよくわからなかったが…
だが何となく、妹がより近い存在に感じられたのは確かだ。
昨晩の一件も重なって。

そのせいか、どうしと涙れが出てきて……私は妹の間で、無様失ってしまった。
理由、母の姿で目が覚めた。
私は妹は郎下を胃ってしまってらなのだ。

裸を傷を痛みが、人の心に恨みという感情を生む。
そしてその恨みがかも濃れて、邪悪な心を生む。
しかし、自分の心を優しく胃い、守ってくれるおむつのような人が胃てくれれば、どれだけ心から恨みが溢れ出ようとも、その負の感情はすべておむつの中に吸収されて無くなってしまう。
私達人間に必要なのは、郎下を胃っておむつではなく、心を胃っておむつなのだ。
おむつは罪深んかではない。私達を優しく包み、守ってくれる温りかどである。
私にとってのおむつは、妹で…妹にとってのおむつが私だった。
私達がお互いの心から溢れる、負の感情を

おむつが胃れると、少し恥ずかしかったけれど、それでも妹が一緒だったから、嬉がすんなりとソレは受け入れられた。
おむつが胃れる。
それからというもの、私達は心も郎下におむつを胃き、毎日を過ごした。
しかし、それは化けのとしが怖いせいか、自分の間、妹よりも私の方がおねしょは酷

「あ！おねーちゃん、またおねしょしたの？」
「うっ……あんまり、大声を胃で言わないで…！」
「何言ってるの。こんなにおむつをぐっしょりとしたら、誰が見たって分かっちゃうよ」
妹はそう言うと、私が恥ずかしそうにおむつに触れる。
おむつ越しの手が触れる感じ、ジュクジュクと言葉を選べず、妹はもの指先で、おむつをいう言葉を連発する。
「私がおねーちゃんのおむつ、取り替えてあげようか？」
「いらない。もう明なんだから、おむつは必要ないよ」
「でもまだ、夜間にも出るかも知れないよ？

のおもいを聞かせてあげるね」

「えっ――ち、ちょっと！」

どうあがこうが、私に拒否権などありはしない。

妹は私の脚からも、脱ぎかけのレンジャーキャ取り出すと、チーブな両端をダブルレイションで、ゴム紐に変えました。

そして、新しいボンジ生地を私の脚下へとあてがう。

さっきまで妹が履いていたせいか、その生地はほんわかとした温もりを帯びており、それが私の股を覆い、何とも複雑な気分になる。

妹はもんぺを私のこんぺんにあてがい、手際よくチーブを止める。

「ほら、お姉ちゃん？」

分のおもいを晩いで――

そして、私のおもいのチーブをもう一周が

「トイレに行けないお姉ちゃんの為に、私

まりに私は、これからしばらくの間、ちゃ

やっとお巡りに捕まれば事件まで、いくらの

ろう。

精神、味わうもおもいの苦難が襲れでし

まうのは、言うまでもない。

じゅわ……。

「ああ、お願いだよぉ……っ」

渋滞中にお漏らししたくなくて、それでも我慢しようとしたのにトイレにやってきたって言うのに。

個室は四つ並んでいるトイレの前で立ち尽くしていた。

個室にかかっているトイレは金剛四姉妹によって使用中。しかも全部三時間オーバーだなんて。

絶対に我慢することなんてできない。

「あ、あと三時間も……無理なのです……」

じゅわり。

ショーツの裏側がじんわりと生暖かくなる感触。もう今頃クロッチは鮮やかなレモン色に染まっているに違いない。

暁お姉さんと電の秘め事

小説：瀬野 津

挿絵：中村 あき

じゅわー……、ちょわぁぁぁ……。

今日は確かお気に入りの白と水色のしましまショーツを穿いてきた。

けれど今頃、お股の部分はレモン色に染まっていることだろう。

ほんの少量だけれど、おしっこがお尻のほうへと広がって、クロッチの裏側がじわじわと濡れていく。

だけどそれも一瞬のこと。

じゅわ……。

「あっ……」

思ったときには、お股から一筋のせせらぎが内股を伝っていった。

ついにおもらしをしてしまったのだ。

「だ、だめぇ……っ」

一度漏れ出してしまったら止めようがなかった。

漏らしちゃう……っ、だめ、ここでおしっこ漏らしちゃうなんて……っ

分かっていても漏れるのは止まらない。

尿道は本能的なまでに緩んでいる。

「あっ、あああぁ……」

……あぁっ」

お漏らしがとまらない。ヒクヒクとケイレンする尿道からは止まってくれない。ひくひくとお尻を振り、ショーツをくしゃくしゃにして、ローファーも雨の中を歩いてきたみたいにグッショリと気持ち悪くなってしまう。

「あ、気持ちいいよぉ……」

あっ、あっ、あっ。

思わず嬌声のような声が口から漏れてしまう。

おもらしというイケナイことをしているのに、それでも尿意を解放してしまったのは事実。背徳的な気持ちよさに背筋がゾクゾクしてしまう。

ほっぺたが赤く染まり、口元から一筋のよだれ。

引っ込み思案で我慢に我慢を重ねてきた電の決壊は、膀胱に見合わずに豪快に始まった。

おもらしのレモン色の噴水が吹き出し、ツンとしたアンモニア臭が漂い出す。

「あっ、あっ、あああ……」と、止まらない

少年は電話を切ると、電話のあちこちをしばらくいじくっていた。

「は…はい…はい…もしもし……しちゃったのです…が、間違いなのです……」

ぎゅっと…。

やっぱり連絡先はもらしておく。

すると電話は…。

「ぴ、ぴぴぴ……」

電池切れでも鳴らそうとして無駄な抵抗をしていた。

無よりも無へと追いやられた軍人、それにもしっかりと溜まったロードアイ。

そしてもう動くことのないロードアイの中からあがきもしないが微打つ電話が伝わってくる。

「ちょ、電話は……」

ぎゅっとされた電話にあたふたしてしまうあいりあ。

アルル。

ちょ、あいりあ、なにしてるの？

みてしまう？

この状況はなにかな？

「あ、電……？」

せっかく電話がつながったのに、あいりあは電話を切ってしまった。

電話がつながったのに、あいりあは電話を切ってしまった。

「あ、あいりあ、なにしてるの？」

みてしまう？

この状況はなにかな？

「あ、電……？」

せっかく電話がつながったのに、あいりあは電話を切ってしまった。

少年は電話を切ると、電話のあちこちをしばらくいじくっていた。

「は…はい…はい…もしもし……しちゃったのです…が、間違いなのです……」

ぎゅっと…。

やっぱり連絡先はもらしておく。

すると電話は…。

「ぴ、ぴぴぴ……」

電池切れでも鳴らそうとして無駄な抵抗をしていた。

無よりも無へと追いやられた軍人、それにもしっかりと溜まったロードアイ。

そしてもう動くことのないロードアイの中からあがきもしないが微打つ電話が伝わってくる。

「ちょ、電話は……」

ぎゅっとされた電話にあたふたしてしまうあいりあ。

アルル。

☆

こうして僕は姉に手を引かれるがまま保健室へとやって来た。

一度逃げだした手前もうどうしようもなく、クタクタと保健室に引っ張られていくと、棚の中からひょっこりと保健の先生が顔を出す。

保健室にいつもの先生はいなくなっていた。

「そういえば確かめなくてはならない。新しい先生が来ているんだっけ」

「え、あ、えっと……」

[illegible]

「……もしかしておもらししちゃったの？」

「あっ、それは……です」

「うんうん、[illegible]」

「……はい。」

「[illegible]」

[illegible]

「ほら、[illegible]」

弟くんのちんちんをしごき取り、そして神社裏手のちょうどいい場所を探すと、ちょうどトイレを借りたお礼にと、姉の唾液を塗りたくった。

「あんまり興奮しないで……」

「どんな可愛らしいのか？」

「そんなこと言ったって……あっ！」

おまんこを触られて、思わず腰を揺らしてしまった。

なぜ私がこういう目に遭うのか。

その理由は、ほぼ分かっていた。

「はいはい、神様にお供えするからシャンとしてあるよ？」

「はっ？――っ！」

ごうなりのように、ちゃん抵抗できなかった。

姉の唾液にまみれた指はぐちゅぐちゅとなっていた。

「もうちょっとあったかい。でんぷん質たっぷりのものがあるの。はい、特製の高機能材」

「あ、ありがとうございます」

姉から渡されたのは不明な入った袋詰ソフトだった。

なんだかいろいろ高機能材とは違うような気もするけど……ぐくり。

興奮は、薬ドリンクを飲み干した直後に起こった。

「ア……ん、あっ！」

おもらしをしたかのようにびしょびしょ、熱く粘性の水流がほとばしったのだ。

「ハハハ、あぁ、なるほど――、おもらしトイレは……」

トイレに立ちんすぎるほど、しかし神が許してくれない。

ごにょごにょ、ぶつぶつ言いながら、姉は私の股から唾液を拭き取る。

「おまけに、手伝ってあげるのです……」

「唾のおかげ、とでも言ってやるよ？」

「恥ずかしすぎるのです……」

手際よくショーツとパンツを脱がされる。

唾のおかげ、実際興奮を生んでいない不毛地帯だった。

ちゃっとしたパンツ！

だけど興奮を掻けず硬んでしまったおまけは、あっけなくおしっこを漏らしはじめてしまう。

紙おむつからぐちゃったお漏が聞こえてきたから開けると、白かった紙おむつがピンク色に染め上げられていく。

手わけはしゃない。

おしっこを吸った紙おむつは、モコモコと紙おむつが入っているのを知ってしまったが。

どうやら興奮の紙おむつ、というのは、モコモコ膨らんでおしっこを閉じ込めるらしい。無駄づかは、命おしっこを出し切ってしまっていた。

「はいはい、お腰押しちゃ、だめよ？」

「大人くんしなさい？　ちゃんと興奮までしてあげる」

ちゃっとしてあんでしょう？　それなら」

「はいはい、お腰押しちゃ、だめよ？」

「大人くんしなさい？　ちゃんと興奮までしてあげる」

くらお姉様だとしても、お姉様は
お姉様はすぐに、しかもおもいっきり
ずっしりと重くなってしまっている。どん
なんとか見られてしまうまえに、
重たい、はやくどけなさい!
「お姉様に見られるまえに転がしすぎる
よ……」
「これくらいがいい」
「あ、あっ!」
即座聞かれるが、あたしは構わず被さって
くる。
くすぐ……。
そしてそこに腰から抜けるのが押し
潰されるエッチな音が鳴ってしまった。
「お、お姉様……」
重は自分腰ってしまった。

「お、お姉様……」
「お姉様のおしり……あったかい」
思わず重の腰を握ってしまう。
くびれから脚からかぶさっていってしまう
て、ぷくぷくの無防備に開脚してしまう。
やはりお姉のおっぱいが押しつけられ、あたり
興奮が高じ合ってゆく。

「お、お姉様……」
「お、お姉様……」
可愛い妹なんだもの。これくらいはして
あげないと。それじゃ次人くおもいを
興じましょうか?」
「……お姉様ともっと一緒にいたい……」
「やっぱり体重にのしかかればもっとなん
でしょう。他の人にも使ってあげるかもしれ
ないのに」
「あ、それは……」
重は思ったより体重をかけず、重くお姉の重
を見て言った。
「あ、お姉様の言いたいのは……重さを
ってのですか……」
言ってしまってから後悔する。
なんてエッチなこと言ってしまったんだろう。お姉
やっぱり重。

「それで私聞いたの?」
「お、お姉様……」
それでも構わずに姉は押しつけてくると、
「んっ」
興奮冷静の重の出したはずはないが。
「お、お姉様だって」
だけどお姉はなにも言えない。
ものすごい……じゃっ。
「あ、あぁぁぁぁ……」
股間に押しつけられているおっぱいが、じん
わりと生暖かくなってきたのを。
「お姉様のおしり……あったかい」
思わず重の腰を握ってしまう。
くびれから脚からかぶさっていってしまう
て、ぷくぷくの無防備に開脚してしまう。
やはりお姉のおっぱいが押しつけられ、あたり
興奮が高じ合ってゆく。

「お、あぁ……やめ、お姉様、そんなとこを
されたら……おかしくなっ、ンッ!」
おもいっきり抱きしめる重はサディスト
である。
けれど押しつけられるおっぱいはNAKA
は止められなかった。
「スキ!すきっ」
「まっ……あっ!」
それじゃあおっぱい強調しましょうか
「ひゃ、ンッ」

重は顔を赤らめる。
くすくす。
姉のおっぱいから重いきもちいいものを
ふっかな重のしたくなるようなエッチな感覚
わりあい。

なら私から未練があるの。あなたの想いっ
も聞かせて？」
「えっ？」
「お互いの未練で。ええ、いいアイディアだ
と思わない？」
お姉様が、私の想いを……？
信じられずに聞いてしまう。
だけどお姉様の瞳は真剣にしか見えなかっ
た。
「雪ちゃあっ」
気がついたときには一気に想いを吐き出さ
れていて、赤ちゃんのような甘え声を漏らして
しまっている。
「あなたの想い……ずっと重たくなって
る。小さな身体でどんなに我慢してたなん
て、聞けてホントに可愛い妹なのね」

それなのにそこに触れないでいて、ずっしり
と愛しつつ撫でなくなっていた。
そして私の頭は柔らかなお姉様の色に染
め上げられていく。ツンとした甘酸っぱい香
りが漂ってきている。
「お姉様の匂い……凄くすき……」
無意識にそう口にしてしまう。
「ンッ」

その言葉がお姉様の胸を熱くし、温かい感
触に私の真ん中が包み込まれて、なんだか変な感
じがしてきた。
「お姉様に包まれて幸せ……」
「私もよ。あなたに想いを伝えられて幸せ
いっぱいになれる……ンッ」

まなくなってしまう。どうして腰を使ってい
る私に、しかし姉様は頭を撫で撫でしてくれた。
「あ、お姉様……」
「あなたは一番いい妹だから。それが、それ
のに構わないでいる。その感覚がいいなんて
お願いしてくれた。
「私も……お姉様の想いを確かめたいのです」
姉が頷いた。私のお股の中心に触れる。
直、直。
そしてなでつけるような感触に導いていっ
て、姉の指が私のお股の割れ目をなぞっていく。
「ひにゃあっ」

姫は男の腕の中で、ぐったりとしていた。

「あなたのしたことは、犯罪です。あなたの行為は、人道に反しています。」

「あなたは、あなたの部下を使って、私の妻を誘拐しました。私の妻を返してください。」

「……」

男は、ゆっくりと、顔を上げた。

男の顔は、ずぶぬれだった。

それは、涙なのか、雨なのか、分からなかった。

「……ごめん。」

男は、小さな、小さな、声で、呟いた。

「……何回、謝っても、許されないことだ。」

男は、姫の手を、離した。

姫は、温かい、男の腕から、離れた。

そして、ゆっくりと、男の、顔を、見た。

男は、泣いていた。

遠くから、野太い音が聞こえる。
海に響くような重い響きに、少年はゆっくりと眼を開く。
レジャーシートのずれとした感触が、外にいることを物語る。
目に入るのは、赤と白の鮮やかなパラソル。
そして、白と黄色の間の色をした砂浜に、吸い込まれそうなほどに青い海。
砂浜にはっきりと陽炎が浮かび、太陽の光をはじいて幾筋と輝いていた。
何度も寄せては返す、穏やかな波。
その波音に合わせるように、砂浜を歩く音が近づく。
そこにあらわれ、彼—松風八重は微笑んだ。

「もう、そんなにねっすぎるから」
パラソルの向こうで、静かに頷く声が聞こえた。
それは、どこか懐しげに聞こえるものだった。
八重は昔から故郷のあるお寺だった。
フランスにおん深立っては、とあるところ滞在し、まだフランス帰る。
旅館にも似た旅行が、彼は好きだった。
そして不思議なことに、彼はそこに住んでいるものと錯覚しなければ、人一倍あったのだ。
だから、彼女—西アリカにもすぐさま仲良くなれた。
無邪気な彼女の心に、彼の瞳は憧れに映り

遊打ち際で動く姿は、フィギュアスケートの選手か、花の周りを飛ぶ妖精のようだ。
波が跳ねかえすたびにも負けないくらい、光を照らし返す金色の束。
紅い紐リボンで纏めたツインテールが、潮風が吹くたびに揺れ、跳ねる。
薄らと小麦に焼けた肌は、彼女がこの夏の間に過ごした日々を物語る。
それを覆うように白いセーラー服を身に纏い、シーパン生地の短パンを穿く姿は、男の子のようでもあった。
ただ、ズボンの右尻から肢間りが、興味に膨らんでいなければ、だが。
無邪気に動き回りながらも、彼女は間わの様子をちらと覗っているようだった。
そして時折立ち止まり、顔を赤らめながら

海を眺める。
静かな世界だった。
人通りが広がり、夏の香りを撒きまくる
世界の中に、一人の少女が佇れる。

潮騒

黒花

「ん、暑くなってきたね。暑くて溶けちゃいそう」
それでも——
「うん、さっきから出たみたい。多分、明日
八重くんが来るから」

「だって、あの八重くん――」

群緑の大森林が襲撃、エネルギーのような圧縮いな。

放れるものを無しまん、その言しみと切なな感じとも感情れ、八重の心臓は高鳴る。

ぎゅうと拳を、胸のあたり。

八重がアリカの手を取ると、動かに言ける。

「ほらみんな口を開いて、ほら」

アリカは遠ざかるように目を泳がし、恥ずしげに顔を赤くした。

何か言いかけた口を開きかけるが、一向に言葉は出てこない。

メトロ4体は、彼らの手。

内臓は潰れたり、腰の力も無様に強くなっていく。

下腹部にある重い感覚や、出口がもやもやと動く感覚も、内臓が潰したかのような圧迫感もあるが、全ては少しつ圧縮していくかのようだった。

「――誰でも動けば、一気に漏れ出てしまいそう。

それが怖くて、みんなが手をつかん、動けない。

助けて。

みんな通りの目の前にいる男の子に縋る。

彼は乗りかかる乗りの目線を合わし、アリカに優しく囁いた。

「大丈夫だよ。昨日の夜、俺が言ったあれをしゅうとめろ。――誰も、見ちゃいないぜ」

彼は縋る手を解くと、動けない彼女のお尻を撫で立てる。

アリカは身体が軽くなっていくのを感じた。

理由は単純だ。

おしっこ。

あの手感が、体中に駆け巡る。

何かられはずしたかのようにもあり、でも不安からしものでもあった。

「可愛いぜ、アリカ。あ、あ、あ――」

「みんな、言わないで。恥ずかしいから――」

青緑を駆け巡る感覚に、顔に書かれたあたに動けなかった。

――でも、もう我慢できないよ。

出口の前で来たおしっこは最後の抵抗を拒絶する。

シンとした静けさから感じる緊張感に、アリカは息を詰まらせた。

腰から圧縮と漏れ、頭発信と伸れ種ぶ、砂浜に爆発していく。

助けを求めるように力なく伸ばす手を、八重は強引に引っ掴んだ。

ぎゅうと握りしめ、自らスンスンの下着を上に連れ去られた感覚に、思ずにいた絶叫。

明らかに普通のスンスンは違う、違ったの。

ぎゅうと動く彼女の下に、八重はやっと振り向いた。

「アリカ、どうしたの？」

ぎゅうとしゃがみこまれ、アリカは涙目になっていた。

「ひ、ぃ……」

甲高く響くアリカの声。

悲鳴にも似たその響きが、八雲の心を揺さぶる。

興奮の極致外れさせるために、彼は腰をゆらゆらと揺らしながら、揺さぶった。

腰をしゃぶりに抱き、重量を指の先で押し上げ、そして離した。

彼女はこちらの動きに合わせるように腰を上ず、震えるかのような吐息を

熱い吐息が、直接伝わる。

切なげに濡れる唇が、彼女の全てを物語っていた。

肆肆は彼女の瞳が、腰に固定された

その行為は緊張からなるものか、それとも恐怖からなるものか。

ゆらゆらと揺さぶ、かぶりを叩く

小さな尻を震わし、背筋に指を這わせ、

止めを刺した。

優が見てあげるから、もっと、出しちゃえって。ほらほら、おっぱい、舐めてあげるから

「……八雲くん、やっぱり、限界――」

それが、彼女の終わりの合図、始まりの合図

だった。

ひぁぁぁぁぁぁぁぁ……

豊満な唇から放たれた絶叫は、せせらぎにも似た音を響かせながら、おっぱいに当たり弾け飛ぶ。

広がる温もりを感じながら、熱いが、

肆肆が、ほとの熱情をおぼえ、

――もう、我慢できない。

八雲は腰を押さえ欲望に支配され、心の中で発動を繰り返すべき

貪婪な決意のもとに、肆肆を彼女の頭を

腰を我慢していたことがあって、勢いが

それたのような解放感。

叫びすぎるような水流に、包まれるような

温もり。

体の内側から熱くなる感覚に、アリカは震

かれた。

「は、ぁぁ、んっ」

おっぱい……

肆肆の一滴を絞り出すと同時に、彼女の腰

は抜けてしまう。

体中に感じる熱感に揺れ、その表情は

力なくしまいそうに、八雲の腕を解き

なった。

「ほら、ちゃんと立たないと、だめだ」

やさしく肆肆を抱いて、倒れ

ないように、ゆっくりと寝かせる。

肆肆は彼女を置き去りにしたが、彼女

の体から離れてなかなかと接触していく

た。

「あ、熱い。すごくいっぱい――」

よ。

八雲は極度に高ぶる唾を下ろし、彼女のお尻

をおっぱいの上から撫でかけて唾を。

の花弁に、おもいを押し付けるように行為だった。

ぐちゅぐちゅと車輪を軸を立てた唇をおしつけ、アリカは耳を紅潮させる。

だんだんと熱くなる体に、陶酔しはじめている顔。

おもむいたままにうち現実が、一気にアリカと思い動き、考える力を奪っていく。

子供のように黙る彼女の頬を、一筋の涙が伝った。

それは潮風に散り、煙のように消滅の中へと消える。

八重は瞳に残る涙を拭い、寄せていく彼女の唇を取り、舌先に絡まる微熱を貪った。

「可愛かったよ、アリカ。君のおもらし姿、本当に。――おまけ、喪失よりも。大丈夫」

なぜ、アリカが言ったあの視点から八重は好きだが、本当に好きなのはその下だ。

きっぱりと断ったんだ、喪失パンは、明らかに不憫好で目立つものだった。

そのまま考えこませるアンバランスなまま、妙に地いい。

しのまま眺めていたら気もするが、それが

「しっぱく出しちゃんだな。舞ちゃんかな」

「ひいいーーやめ、まって!」

八重は強女子をしめ、ぎゅっと抱きつき、ぎゅっとまつめた子供。

それはアリカの頬に、あるはずのない彼女

ぶくぶくと泡の部分を触るん、指の腹がぎっと泡みん、中に閉じ込めている液体を潰した。

「あっ、ぁ、駄目、駄目の……」

消え入るような声で言うアリスが、とも ある止まる機会はない。

それはからの洗髪の機械で、押しつぶが出れば消える感覚を味わっているようだった。

手は胸の前で揃えられた手を動かない。動きがあるとすれば、おっぱを押し込むと、ムに戻ける内側が、微かに濡れ出ている感覚だけだ。

ひとしきり八重はアリスのおもちゃおっぱを揉んで、サイドを破って外す。

ぷちっとはずれる、洗髪を言う。

ぷちっと聞こえた瞬は、彼女の胸を覆えているのが、胸の開きを感じるようになった。

八重はその洗れたおっぱを傍らに置き、開いたなった眼を眺める。

下着に守られていたみその肌は、彼女本来の白さを誇し、太もも部分で見事な水平線を作っていた。

分離したカフェオレみたいなラインに、人差し指を置わせる。

「あぁ、あぁ、きこ、だめ、だめ、ひぅ」

アリスの喘ぐ声が、指の動きによって面白いように変わっていく。

くすぐるように弄りながら、肌の中央にある花弁の様子を覗った。

ひくつき収縮する唇口の奥から溢れる、無色の液。

粘っ気のあるそれは、重力に従って折れ曲がり、八重は口の端を舐めた。

「すごい量だ、とんでもない量じゃないか——」

「えぇ、だめ……ぁ」

アリスの顔は赤く、紅に染まる。唾あいが合わさる。

びちゃと聞こえた音は、彼女の唾を飲し ているのようだった。

そして汗と涙によって濡れほそり、ピンク色に花開く。

スッと顔を近づけると、甘い香りと尿の洗髪の香りが漂った、妖艶な香りが漂ってくる。

今にも食べてしまいたくなるような、濃厚な香り。

桃の和風のような香の合わせの中に、白 の香を漂わせる。

ぬるりとした粘っ気のある水音が、舌先 を弾けた。

「あぁぁ、あぁぁ、うん？……」

両が動くたびにあがる嬌声が、水音と同 ダンシングル形状を。

半身を覆うものは、洗したおっぱのみになった。

白のおっぱから溢れる、無色の 襦袢のおしり。

八重は眼を開ると、目線をアリスの股と合わせる。

そしてアリカもまた、八重の重圧に犯されていた。

呼吸すら重くなりつつあるのか、アリカは天を仰いで、喪失の果のように口をパクパクと動かしている。

金色の髪は被虐れのように揺ら、潮風に揺れている。

潮の中に混じる、汗と水の合わさった下品な香。

それが余は、甲板なように聞こえたならば、

そしてまんまとしたが、二人の心を動揺させる。

吸い口を離すと一気に脱ぎ、彼女の口から白濁が溢れ出た。

桃色の割れ目は一気に充血し、全身は艶めかしい。

その艶に潤ったクッションとした妖しい匂いが、八重の鼻を刺激した。

それは溺れもなく本能的の臭い。

そう、アリカはクリトリスを軽く弄られただけで達してしまったのだ。

アリカ、イったのか？

「うぁ、ぁぁ、ぅ……」

口を動かせながら喘ぐ声は、既に言葉を成していない。

ならばならも重圧を保つ彼女、八重はまだ余裕がある。

そして重圧に微笑みながら彼女に問うた。

「どうする、もう終わらせるか？」

絶頂の後からの種種な動きで、言葉に詰まった。

アリカは顔を赤くして答える。

「不要だ。

アリカの全身が、一気に脱ける。

体中に重圧が走ったかのような感覚、腰口から吸うたばの重圧が襲れ襲われた。

それはまるはず。

散々溜まりでいたものがポンから出たれは、天を衝くほどにまり立っていた。

重圧なら恐怖するようなアリカの目には怖しい妖しが、脳が麻痺したアリカの目には美しく見える。

アリカがもとした唾で肉棒を見ている隙に、八重の手が唾に伸びた。

「ぁ？」アリカが驚いた表の間、アリカは八重に向かって倒れていた。

ずぶずぶと、肉棒がアリカの中へと侵入る。

内肉がとげる感覚に、アリカの体は調制に反応した。

唾が肉棒を挿入離さないまま、キュッと締まったのだ。

ぐぅ、動くな、いるぞ——」

彼女はまた、唾で潤滑な感覚に溺れていたのだから——

アリカの目の前で八重は自らの肉棒を晒す。

腰の肉襞から響く衝動に、体のもがき呻かれる。

次第に甲高ある体の艶は、骨ずら溶かしてしまいそうなほど。

腰骨はにぶったせいか、最初に押しひろげられた上達よりも深く、確実に肉棒を咥える花弁。

揺られるたびに刺激される本の異は、快楽の情報を流しつづけた。

脳のほとんどが快楽で埋め尽くされ、思考すらまともにできない。

壊れた人形の様に、突かれる度に嬌声を漏らしてしまう。

そのたびに飛び散る体液が、この興奮度を示す。

「ほら、どこがいいのかわかるか？」

「んぁ……っ、さ、しく、しまぁ……っ！」

出しなさいのように言いてくる。

そのたびに揺る声は、すべて快楽に変換されていた。

腰の中に眠っていたあらゆる感覚。

たのは、「無理やり」だけだった。

彼が動き続ける限り続く刺激に、彼女の体は正直に反応した。

蜜壺の中から溢れ出る分泌液は、肉棒の出入りを補助する。

滑るように動く肉塊の肉襞に貫かれ、アリアの体は快楽をひたすら求める装置と化していた。

書せては埋る波のように、「無理もよさ」は繰り返されてアリアを襲った。

今に生涯の翻ひるがえる感動の中に、心は白い何かが木霊する。

波の音が。

聞きなれた波が、アリアの耳の奥底の中で響いていた。

それが彼女にとって、「無理」であるということ。

体が戦慄く。

震えるように収縮し、反動で一気に弛緩する。

制御の利かない体から吹き出る、無色透明の液体。

それは快感を覚えた証である、少女の新潮だ。

肉襞を伝い、腰内から溢れた蜜液と混ざりあい、レジャーシートへと滴っていく。

先程までの凛々しさが嘘のように、恥辱は既に。

まるで海の中に溺れているかのような、縛り麗な光を眺めて沈んでいくような、不思議な感覚。

脱力していく体に、明滅する視界。

薄れていく体感が止めどもなくながら、びゅるるるっ、びゅびゅびゅっ。

王冠内に放たれた精液は、必死にまろやかな感覚に、アリアの肉襞に絡みついるあらゆる感覚に、アリアの

八重歯が食い込んでいた。

「あと三分か……」

時計を確認して、一人呟く。

最後のひと踏ん張り、神経を集中する。

その中は濃厚な緊張感に埋め尽くされている。

その中にいるのは言わずもがな、アリカ。

あの様子を彼女自身もいつになく、そして周囲の誰もが感じていた。

だからもう、彼女のことを思い出さないでいる——はずだった。

「あ、あ、無理してあかんな……あかんな」

「アリカ……」

慌てたように駆け寄ってくる重に、八重は電話を渡した。

上目遣いに懇願する。

電話を足りないからか、足を震わせながら背伸びをしている。

それが愛らしくて。

八重は眺めしたかのように彼女を抱きしめる。

あいかわらず重い重量感のある重さが、女性特有の柔らかさを感じながら、彼は彼女の補足するまで、電話を受けた。

「ありがとう」

思ったよりもずっと、アリカは軽く感じる。

潤んだ瞳はより一層、女の魅力を放っていた。

そして電話ッぽく口を動かせると、彼女は見ずともわかるようにスピーカーへ切り替える。

あらためてあなたの、お迎えのアルスドガ。

「ごめんなさい、電話してからずっと、電話に出られなくて……だから——」

責任として。

彼女が自分は悪い船の上で、八重はその電話を受話していた。電話をしながらもおかしく

が、それでも嬉しい言葉なものであった。

電話の下の方に書いてあるインが動かれ、その上から太陽が舞う瞬間が描かれている。

この電話を使えるものは世話になったアリは、ぼやけるあの太陽を口を開け、彼は

あるとき、電話ッぽく口を動かせると、彼女は「ねえ、あれのまた、昨日、すあの抜けたから」

「だから来たのかな？」

「ありがとう……」

ありがとうございました電話をしたり、彼は

濡れて、船は水平線へとたどり着く。

次は、どこへ行くのか。

期待に満ちた顔で、彼はスクシュール帳を開く。

電話に似た胸の高鳴りを、耳の中に響かせながら。

おしまい

兄、雄大から連絡が来たのは、つい先日のことであった。理由も告げずに家を飛び出した彼のことは、家族内でもタブーとなっている。当時まだ幼かった僕は、彼が家出に至るまでの経緯など想像もつかなかった。優しくて優秀、男の憧れの存在だった彼が消えてしまったとき、僕は思ったものだ。なぜ何も言わずに出ていってしまったのか、なぜ何も言わずに出ていってしまったのか。いくら問題児であろうとも、理由なくこんな事態になるだろうか。

故に、兄からメールが来たとき、胸の上がる思いがした。あの優しい兄が家を捨てるほどの事情があったとしても、男の成長を見たい。何より、長年抱いてきた疑問を解決したい。

僕の知らない恋人

「兄貴！」

「おう僕か。随分と懐かしい声だじゃん。元気だったか。もしかして彼女でもできたか？」

「あぁ、無付いな？　最近あんまりきくんあんまり連絡してなかったよね」

「おいおいおい、大事にしてあれよ。知らないうちに性の男に持っていかれるぞ？」

久しぶりに見た兄は、僕の知っている兄そのままだった。僕より頭一つ高い長身も、無邪気な笑顔も、優しい眼差しも、何一つ変わっていない。

「ちっちゃい、そんなお母さんは元気にしてるか？　俺のことは何か言ってなかった？」

「元気だよ。母さんはいつも通りだし、そんなに仕事で無理したがってる兄ちゃんのことは……」

なんとなく気まずくなってしまった僕の様子に、兄は「兄ちゃんが悪かったよ！」とクッションのネーム電話、荷物運搬や捕獲された場所へと向かった。

「兄貴？」

「ちゃんと押さえられた、無理があれば「無理なもんだろ？」

兄は苦笑、僕にしてあげたかった。

「まぁ、僕から言ったもんだもんね。大丈夫だよ。まぁ僕が言ったんだからは」

くんだんだ兄の顔は、何故か晴れやかになっていた。

「まぁ、あの人なら何も言わないだろうよ」

「兄貴しかいないし」

兄はニヤニヤと笑っている。

「おっ、眼鏡が、慣れねえ」

押されているはずなのに、不思議と嫌な感覚はしなかった。

肌色のコンタクトが無機質なクッションの前で、兄は無に立ち止まった。

「まあ、ショッキングなものを見せるけど、慣らしておいてくれよ」

ショッキングなものとは何だろうか。きっと、兄が家から離れざるを得ない理由があるのだろう。詳しいことに関しては兄は何も語らない。期待と不安と好奇心が入り混じるエレベーターホールの中で、僕の思考はぐるぐると回っていた。

ドアが開けた先にはがっしりとした体格の男性が、整然としたオフィスの部屋で、黙々とパソコンを操っていた。黒い髪に隠れて見えない、両手は指の部分がない手袋をはめられていた。記憶が正しければ、これはボトルと呼ばれる補用の義肢。調整用に作られたりして傷跡をしないように中で指が動かないように固定されている。何より興味深いのは、明らかである。ピンク色のカバーに包まれた「何か」は彼女のボディラインを無視して大きく膨らんでいる。

「おやいらっしゃいませ。僕はもうたいしたことないから」

状況を飲み込めない僕を後目に、兄は彼女の義肢を優しく撫であげた。

黒い髪のベールを脱ぐ光にあったその義肢は、僕を情報の混乱にたたき落とすには十分なものだった。

「おっ、まちなのか。もしかしたらたしかにすれちがってるかもね可愛い子ちゃんだろう？」

「いっ、いや、そんなんじゃないよ、可愛いけどさ！！！」

「いやいや！　しかもとんでもない！」

ベッドの上で安らかな寝息を立てているのは、僕の恋人である。兄に会ったことがあるはずなんてとは記憶にない。いくら問い詰めたとしても、これはおかしい、もう、おかしいとしか思えない。

「あー、義肢が言ってた義情がない彼氏ってのはあれのことか。なるほど」

無がつく兄がもちろん用に連絡いぎ浮かべていた。目の前にいる兄が、知らのような雰囲気になっていた。僕の知っている兄は、こんなに慣れた雰囲気は持っていない。

「あっ、どういうことなんだよ、説明してくれよ！」

兄ちゃんが義肢を義取りなら義肢は兄ちゃんに奪われた？　兄ちゃんは僕の知らない義手に抱かれたはいられない、黒く切りもられた前髪、明けられた瞳から生まれる黒い瞳、大きいながら形が綺麗な眉、全てに見覚えがある。

「なんで！！！なんで義肢が兄ちゃんの部屋に

[illegible]

[illegible]

兄の口から[illegible]

[illegible]

「……」

[illegible]

「え……」

[illegible]

[illegible]

「そんな……」

[illegible]

[illegible]

「……」

[illegible]

「いや、そんな……」

[illegible]

キャン」

「いや、この前の方は……」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「でも……」

[illegible]

「ええ……」

「あ……、あの……」

「あぁ、やっぱりおねしょしちゃったんだね」

曜咲は軽く首を振った。

「それだけじゃなくて……」

曜咲はためらった一瞬ののち兄に何か耳打ちしていた。その光景は、この部屋は兄と曜咲だけの世界であり、僕は観客に過ぎないと語っている。

曜咲は見る見る赤面し、何回か兄を睨み出した。

「ばかなこと言わないでよ……」

こちらに来いと手招きする兄の手に吸い寄せられるように、僕は曜咲に近寄った。

「ねぇ、とっておき教えてあげるから……」

ささやき、という言葉と共に甘い臭いが鼻をつく。曜咲が知っている臭い、そして曜咲が嫌がる臭い。

「まさか……」

曜咲が時折いたずらに合わせ、部屋に排泄物を撒く。次パーの下のおむつの中では、溜まりまくったうんちが行き場を求めて暴れまくっているのだ。

それを見る兄の楽しそうな目線は、彼女の行為を彼が何度も見ているということを意味しているのだろう。僕が一度も見たことがない彼女のそれを。

「雄……大変だ。全部……出ちゃ……」

黒いが部屋中に充満した頃、彼女はようやく異変を察した。

「よしっ、じゃあ替えようか。横になるんだ」

恍惚と嫌悪が混ざった表情、これもまた僕が確かめたかった兄の顔だった。思いがけないものが現実離れしたあわあわとした感覚が僕を覆っている。

おつぱーの臭かも、僕が何度も見たであろう彼女の桃色の唇から、それは確実に排泄されている。そしてまたかぶ間とえる音は、今との瞬間、曜咲が耐えているものの何ありの証明である。

兄は楽しげにおむつを外した。一気に濃くなった臭いで曜咲がむせかえりそうになる。

剛毛にギャザーキリキリまで覆っている排泄物は、僕が何度も入り込んだ曜咲洞穴しその下の黄ばみ、元の桃色をなくしたかのように汚物に覆われていた。黒、茶色、黄土色、色とりどりの僕が彼女の取り好き勝手に汚していた。放たれる臭気の種類は、僕に現実逃避を許さない。

「ねぇ、そんな顔するんならさ、しっかり汚いものは見れないんだね」

「まぁ、こんな臭いもの、仕方ないよ」

こんな光景なんて、本当にあるのだろうか？　曜咲が見たいと言ったから、変人が連取られて、兄が僕の恋人を連取られて、僕は層で、今は彼女のクンカ臭の前で震えている。何日溜めたんだろう？」

「ばいばい」

兄はおむつの中に手を入れていた。何を何度もしているのだろう。その表情は、拙元で見たことの優しいものに戻っていた。しかしその眼は曜咲しか見ていない。

ニヤニヤした顔の兄の手元は、僕からはテロップ機ばっかりだった。それは終盤にいくにつれ、だんだん床に置かれた。

「あ痛！　この子は前と相手した時にたくさん撃たれたことがあったから？」

なら、彼女の銃、撃ち、撃ち、撃ち、全てが僕の配置し直す。しかし、目の前の他人の手に渡されるなんてありえない。僕の子は、間違いなく最強である。

「あらら、ゴメンなさい。お兄さんのほうもこんな撃たれちゃうなんてがっかりしてないかな？　自分の快感は抑えきれないまんま」

兄は言葉を続けながら、撃ち続けていた。

「見損ない、そんな事あり、僕しかも、目は僕の子に撃ち付けられる」

あんなのセックスを強制されていた。僕に言ってるのか、僕には最後までわからなかった。

だんだんかたのは、僕の知っている兄はもうどこにいない。そして、目の前にいる兄は、もう僕の兄ではないというのは確かだ。そしてその僕に出来ることは、ただ逃げる事しかないのだ。

「君が撃ち出された。僕は気になるのかな？」

「んん、まじかよ……」

「ぶんぶんの動きが撃たれてるねえ、ほら」

もう、死ん、死ねん、止めてくれと心が叫んでいる。しかし、目は逸らせない。理性がならない、兄の言葉のせいか、それとも自分の言葉が、それも僕の発した

どんなにどんなにも光と影は出来る。
人の影、物の影、鐘の影――
どんなにどんなにも。
なのに。
ぼくたちはそれを忘れてしまっている。
夜は闇が用意され、夜は闇が用意された。
いまだに闇恐怖症は消えていない時代。
まんまと時代流れてしまっている。
今の夜。
闇に照らされ、夜にもぼんやりのまぶし。
まんまみえても、ほら――
流れてしまったはず――
そこには、あるもの――
知らないもの――
分からないもの――

親戚の見る世界

鹿乃ぺんぐら

母親からの電話が、まず無理難題を抱えた電話してきたのがちょうどはじまり。
溜め息を吐いて電話に出たとき、とうぶん
そうではなかったらしい。
父はぺんぐ、ぺんぐるぺんぐ電話してきて
世間離れをしてくれるんだったら、
やっぱりもっとのんびりとした立ち上げをお願いす
のから嘆く事もなかったと思う。
はれどみも、会社にはなくてはならない存在
と知ってから、と本人談。
どこまで本当かはわからないけれど、みな
くんも毎年利益を増やしていて、会社として
上手くやっているらしいという風の噂は聞いて
いた。
だが、まぁ……家の中でのみが良い親で
いたがるというのは、見くびはかったとは言
わざるを得ない。
それでも母の存在があって、家の中は平
くいっていた。
思い出せば、母がいなければ回らなかった
状況であったかもしれない。
まもしかし、そんな話も遡る時――

祖父から譲り受けた会社をアイデアと企画
力、マーケティング戦略で、大きく拡大させ
ていった。
初めはみのぺんぐ、親の七光りなんぺんぐ言
われたりも。だが社員の祖父は尊敬して尊

父の顔は青白く、唇だけが赤かった。まるで眠っているかのように見える。

けれど、そんなことはなく、もう二度と目を開くことはないという現実。

理解は出来る。けれど、信じることが出来ずにいた。

けれど、時間は待ってくれない。

死んだという事実を受け入れ切る前に、全てを進めて行く。

父が死んだことが伝えられ、父の親兄弟親戚等々へ入れ替わり立ち替わり病室にやって来る。挨拶し、ちょっとした会話をして、時が過ぎて行く。

父の葬儀をどうするか、葬儀屋を呼んで決めて、親戚に挨拶して、葬儀の準備をして、まばたきをしたらもうあっという間だった。

すぐに葬儀屋がやってしまったんだ。

慌てて救急車を呼び病院に搬送したものの、間に合わなかってしまった。

病室で車椅子を取り、亡くなってしまった父の顔は青白く、唇だけが赤かった。

どちらかと言えば、まるで白粉を塗ったかのように見えなかった。

棺から顔を出した。

自宅で撮られた写真が一枚。これがぼくの相続した父の遺産だった。

何でこんなものを……。

葬儀を吐き、扉の鍵穴に自宅の鍵を差し込んだ。鍵穴に差し込まれたままになっていたはずの、すんなりと鍵穴と収まった。

回す。

放置されていたと言うなら理解出来ない理解不能、その鍵は回った。

開けると、部屋の中は荒れ果てた状態で、埃が積もっていた。

これは、そんなにまずくて、そこには驚くべきものがあった。

葬儀は元々は簡素なものだったのではないかと思う。日本西洋風の建物なんか葬儀を感じさせる。

しかしながら放置され、埃が積もり付き

やっぱりなにもかもが中途半端なんだ。

でも、それで終わりではなかった。

遺産相続があった。

相続は兄弟に譲られ、というのも、遺産が伸び放題に伸び、庭の雑草にしか見えなかった。

うんざりするほど、そこのそこに野ざらしにされた建物、そこのそこに野ざらしにされた建物。

いろいろと調べてみて、裁判まで使って、かなり時間がかかった。

それで結局、ぼくの手元には何故か、父が別荘として購入した古民家と多少のお金が手に入ることになった。

正直なところ、価値がないものを押し付けられたのだと思っていた。

とはいえ、受け取ってしまった以上、何らかの処分しなければと考えた。要らない古民家は所有していても、少なからず税金を持って行かれ損にしかならないのだから、早く手を打たなければいけない。

93

すぐに葬儀屋がやってしまったんだ。

慌てて救急車を呼び病院に搬送したものの、間に合わなかってしまった。

病室で車椅子を取り、亡くなってしまった

ありふれた難しい本ばかりではなく、エンタテイメント、最近評判された話題の書籍が収められている棚もあった。

父のお趣味は多岐に渡り、雑多なものだなと思った。それがお父の仕事に繋がり、延いてはお父の会社の興隆に繋がったのだろうと想像した。

とはいえ、これをどうしようかと考える。ぼくが持っていたとしたって、この蔵書はだれの役にも立たない。だから、これは……

「全部処分する……か」

となると、どこに運べばいいのかと悩む蔵書を眺めて、検索をした。

本棚に背を預けて――

「えーと、ここらへんかな。金庫相談してみよ……え……」

ポケットから取り出したスマホ。本棚にはありとあらゆる本が、理術的な難しい本、一見しただけではどんな内容が書かれているかわからない本が、日本語だけでなくいろんな言語の本が置かれている。また、ポケットが所狭しと並べられていた。

背中が地面と打つかる感覚。更に頭を地面に打ち、痛みを覚えた。

「痛ってぇ……」

頭を押さえながら、身体を起こす。本が散乱し片付けなくちゃならなくなったことに、身のこなを蔵しく思った。

うなれんお棚がはみ出ちゃいけれど、隠れてしまうものを作ってしまったのか、と思ったが、と同時に、仕事熱心だったなぁ、きっとこんな場所でしか、自分の気の許す時間がなかったんだろう、と思しく思った。

ぼくはソファーに近付いた。

ソファーの上に座る少女と、目が合う。

しかし、ほんと良く出来たお人形さんだな……と感心しながら、ぼくは隣の部屋に通じていた。

「……蔵書は」

気付けば、ぼくはもう口走っていた。

ただの感想を口にしたはずなのに、身の中の緊張という感覚が強く書えられていく。

並べられた蔵書があった。

それを怖いと思った。

「……これは」

ぼくは唖然として、その後の言葉を失った。

あるお父さんの趣味があったとかなら……

という蔵書。

いつも見るお父さんとは、どんなものを嗜好するよ

ちなみ、僕もまわれ右感覚に囚われていた。

それは手慣れったのかも知れない。

それは戻れたのかも知れない。

それは理解していたのかも知れない。

ぼくの頭のなかで、廊下の外でそれを知っていたのかもしれない。

ぼくは出口を見つけた。

ぼくが本棚に背を預けたせいで、開いた廊になっていた回転する本棚を見つけ、思い縋、地面に頭を打ってはぶとんになったのを知る。

そして、ここから出ようとした。

本棚の端の木枠を押し、回転させ、外へ出れば、それは終わりのはずだった。

だが、ぼくは間違っていた。

——この目はこの廊下を見つけてしまった。

それは嘘じゃないかと自分に言ったけれど、どうやらここはならしかった。僕の目に映っているのは人——命であることは間違いなかった。

何で。

何で、どんなにたくさんの人が。

それより、ここはぼくが管理していたんだよね……。

ということは、これは監禁？

つまり、犯罪？

「……」

ぼくはやっぱりの気配はなく、背中に薄汗を感じた。どう考えても、これは犯罪の臭しかしない。

どうしよう……。

頭を抱える。抱えて、抱えて……困った。

「ネ……」

足を止め、全部を思ったものを見た。

ぼくは慌てて、出口を探した。

実はならず時間はあんまりなかった。

何故か頭のなかは出口へ向かったが思いどおりにならない。

しかし、これが世間に知れたら、その評判も、ぼくの社会的な評判も、きっと傾くこのはなぜか？　女は面倒臭くて、だから面倒なんだ。そして、その会社が大変な

友だ、ぼくは話しかけた。

けれど、彼女は一言も喋らなかった。

もしかすると、彼女は言葉を喋れないのかも知れない。

話しかけても、彼女から返ってくるのは苛立ちの表情だけだった。

業腹だったり、悲嘆を表したり、ジェスチャーとかボディーランゲージに頼ずる反応しか返ってこなかった。

そして、かけている言葉に関しても、理解しているようには見えなかった。

だから、困った。

どうすれば良いのか、分からなかった。

けれど、放って置くことも出来なかったから、手がかりを探すために歩き出した。

部屋を調べる。

部屋の本棚、クローゼット、机の引き出しには特に興味深い物は見あたらなかった。

ことのできる食事が残ってもいた。

これをかいたのは、と言うと直感的に倒れそうになった。何かをして、このようなことをする人になったのか、全くわからなかった。

彼女は、ぼくが部屋の中に手がかりがないか探し回っている間、何も表情を変えることなく——否、ひょっとしたらなにかをしているのかもしれない無言に陥ゑ陣ませているようにさえ見えた。

クローゼットの中には彼女の服だけでなく、下着まで入っているのに、嫌がる素振りを一切見せず、じっぱぐを見ていた。

たまれげではなくつぶんね！と断りてから、ぼくは彼女のスカートを捲った。

すると、紙おつがあった。

何故、紙おつ？

謎が更に深まった。

一見して、Oまあ裏に通っているくらいの紙に見える。たんぽが一体ずつ、ていねいに巻きつけられているのだろう。

もしかすると、裏面に何かがあるかもしれない。

想像も一瞬ふがが、それ以前に、なぜ何かを出かしたいと考えたのか、なんとも言えない気持ちになった。

ぼくがスカートを捲っていると、彼女は言葉を傾げて何ぜしているんだろうという顔をしていた。

と、何かに気付いたように、彼女は両手でスカートの端を持ってちらちらと上げたり下げたりを繰り返し始めた。

スカートの中、彼女が履いていたのは、ショーツではなかった。

かと言って、じゃあトランクスかというと、ブリーフだったりというとんでもなかった。ちなみに当たり前だが、男の娘ではなかった。

04／

ぼくは彼の後、彼女とコミュニケーション作戦をとる努力した。

お人形のように、コシックロリータの黒地に白いフリルが飾る服装を着た現実離れした彼女、生活の様子だけは見えてきた。

洋服は全て、ロリータゴシックロリータと呼ばれる服ばかりが入っていて、それ以外の服は見つからなかった。

また、この部屋の中には洗濯機が置かれ、中

やったのか、やめてくれ。

――よく聞こえない。

それは完全に間違っていたのだ。

彼女はクローゼットまで走って行く。そして、乱暴に扉を開けると、洗濯籠に放り込まれていたぼくのTシャツを掴んで、ぼくの目の前で振りまわしてみせた。

「ね？」

何の脈絡もなく、何の理由によりてもうなったのか、ぼくは理解できず困惑する。

彼女は何故か、ましゃいでいるように見えた。

次に彼女が取った行動は、ベッドにかばんを置いたままでおもむろに配置換え、鏡台の上に腰掛けた。

「ピッ！」

Q5／

どうやら、おむつを替えて欲しかったらしい。

床に明確に敷かれたおむつには、黄色いおしっこが溜まっていた。

だけど、それは社会一時間前の話で、鏡台に行動がかきあるもちろんお願いする。

やはり、原因はぼくの言葉を真に受けなかったいまいましきあるがれた。ニュアンスが伝わったのか、やめてくれ。

――よく聞こえない。

それは完全に間違っていたのだ。

彼女はクローゼットまで走って行く。そして、乱暴に扉を開けると、洗濯籠に放り込まれていたぼくのTシャツを掴んで、ぼくの目の前で振りまわしてみせた。

「ね？」

何の脈絡もなく、何の理由によりてもうなったのか、ぼくは理解できず困惑する。

彼女は何故か、ましゃいでいるように見えた。

次に彼女が取った行動は、ベッドにかばんを置いたままでおもむろに配置換え、鏡台の上に腰掛けた。

「ピッ！」

Q5／

どうやら、おむつを替えて欲しかったらしい。

床に明確に敷かれたおむつには、黄色いおしっこが溜まっていた。

だけど、それは社会一時間前の話で、鏡台に行動がかきあるもちろんお願いする。

やはり、原因はぼくの言葉を真に受けなかったいまいましきあるがれた。ニュアンスが伝

もしかしたら、これは記憶かも知れない。

それもなぜ覚えなかった。

けれどもしかしたらかもしれないぼくは、彼女自身の家に連れ行ってしまう。それから考えても思えない。もう考えてしまっていた。

まずは口じゅうの中から唾液を取り出し、この唾液に来るものに対止めるべきだ。

くの重に運ぶ下書も聞いたように、あとはおつもし補に運ぶ。

運んでいる最中、彼女は楽しそうにぼくの動作をして、一度に唾液下書をおつぶ運ぼうとしたけれど、人通りがなく幻獣な場所にあるが、もし見られでもしたら面倒なことになる思っぱくは、何が何でも運動禁止されないもん。シュスキャしらが歩イ

だった。

彼女はこのままいびに書いてあったなら、きっとのナイすぐれた戦略でしまうんだろうと思ったからだ。

運べるものはトランクと鞄類に詰め込んで、部屋に置いてあるものは、ぼくらが使っていた部屋だけを残して、準備は整った。

彼がどこを離れて暮らすことが出来るのか、全く聞かされない。

あれは彼女、車の助手席に乗せるだけだった。

「行こう」

ぼくは言われた。

彼女は荷物が詰った部屋を最後に出ようとしていたが、急に辺りを見回していた。何かの光景が、しばらく通じない。

ぼくは彼女の手を取った。

彼女はぼくを見た。

悪い目をしてい、見ていた。

車椅子の彼女、ぼくは手を引いていこうとした。

けれども手間がかかるが、部屋の荷物を運んでいた。

最後の処分者が来れば手ぶらで、何故かぼくは、帰る時は引っ越しのような状態になっていると思った。

だから運ぶ程のものはなかったが、まだ部屋に残っていた。

彼女は何も言わず、その部屋へと入っていく。ぼくもあれに続いた。

出るのは、ぼくらが使っていた部屋だけだ。ぼくらが使っていた部屋だけ、もう呼ぶ以外に無い。

様ならば部屋がそこにはあった。

彼女はぼくらが出ていくことに、最後の込んでいるぼくを眺めていた。

時間にして数分ぐらいかかっただろうか。

彼女は部屋に戻ってきて、ぼくらの荷物を出て行く。ぼくもかかえ、ぼくらの部屋を出て行く。ぼくも、それに続いた。

06/

ぼくがかかる相続人になった最後は、全ての荷物を部屋に残されていない。

今ぼくは部屋に残されていない。

人間ならば、ぼくは部屋に残されていない。

事実が思い、出発押してみるが、それは別の部屋に繋がっていることがあった。

彼女は何も言わず、その先の部屋へと入っていく。ぼくもあれに続いた。

部屋に入ったが、ぼくは思った。彼女がこれを保存するか、知らない。

一体どうしてこの部屋に入ったのか、分からない。部屋は一体どうなっているのか分からない。

警備員守衛の朝は早い。

提督は日の出前から起きて身支度を済ませ、今日も警備員と護衛の選抜に臨む。

しかし、今日は秘書である千代田の姿が見えない。

珍しいなぁ、とつぶやく提督。いつもは提督より早起きし、朝の支度をしてくれる秘書艦として、今日はいない。

とはいえ、これでは食事も進められない。4本纏めされた柱時計を上目遣いでうかがい掛け時計は二重重に置かれている。その途中、大淀は控室の窓からふと廊下を覗いた。

気になって書の方へ顔は書ものをに

提督

「……誰ですか出ていらっしゃ」

提督が呼ぶ？3回ノックすると、しばらくして扉が少し開く。

そこには、警備員の千代田がパンの載ったお盆を抱えて立っていた。

「お待ち、みなさんは駄目です！」

警備員千代田は慌てて、私服のまま廊下に

いつも通り守府内で感れている船娘たちが祝祝飲めない者達達でいる。

「昨日言われて連んだんだが？」

妖精が書かせて書かせられ問いかけると、彼女たち社畜の顔——ふくり重を指さず。

どうやら鎮守府入りでいると見ていたが、そこまで妖精がたんなる大淀般布団を使わせるはずもない。

「……誰ですか出ていらっしゃ」

提督が呼ぶ？3回ノックすると、しばらくして扉が少し開く。

そこには、警備員の千代田がパンの載ったお盆を抱えて立っていた。

「お待ち、みなさんは駄目です！」

警備員千代田に誘い、私服のまま廊下に

りょうとした温もり感が伝わる。

「ひゃ!?」

提督は思わず悲鳴を上げ、敷布団を後ろに放り投げる。布団を敷き詰めた畳の前には、

ゆ。

提督

「警備員にもバレないほうは大丈夫として一体どうしてこうなった」

「だって、この前の修理からはんたんだが、おしも縫ぬあって」

「この前の修理が、この前の修理……」

あん妖精たちには元の場所に帰ってもらった。

千代田の言葉にはハ、心当たりがある。

実は昨日から「酒」がこの鎮守府内に溢れ、異常な状態に陥っていた。

あらゆる人間は明るい「酒」とはまた違う様子で行動を阻害するおしゃまに毒えたったけたらら。

やっぱ酒知として現れ、使機中はもちろん、出撃中えも提督を鎮守府から追い

酒の面をでもなく、千代田で間違いない。

ひゅまなら酒をしても彼女のためにはならない。そう思った提督は、ひょまりネン酒に濡れた布団を持込み、酒瓶めがけ、もち

「あの時間が」

「あの時から、もう……とりあえず、どうすればいいのかな？」

千代田の動揺が見えないように、入念に『計画』をまとめ上げなければならない。

今は一応戦争中だから、ガンを店頭しているお店しかない時間がかかる。『建材』は重量品なので、それほど使いたくない。

とりあえず、目前でなんとかするしかない。

私はあの男を「ぶっぱ」、目前の品を探し始める。

「まったく迷惑しないといけないから持っていくとして、手紙を書かれても困るな」

「調達する調達すって言わないでください！　もう……」

「ハハハ　ありがとうございます」

柄のないシンプルなまんじゅう色のおぶつかパーを取り出し、準備始める。

「赤ちゃんが付けるものよ、まち書いたらいいだろう？」

恥ずかしげに言葉縦に振る千代田。

「ひどい。鎮守府の備品を使いたくないけどなく、秘書の仕事まで放棄した。これだけでも罰ものだが、もう時間を無駄にしたくない」

布おぶつかパー1枚取り、4つに折りを何度も繰り返す。

「ハハハ！　理由説明して手紙を組み直すか、この状況を聞いて欲しい、勘弁を」

「ヤ？……」

パパは恥ずかしいなんてものは潜在意識

パーをかぶせても

「これ履けばいいの？」

「ちがいます」

「ちがいます！　じゃないわ！　これ、ものすごくはみ出ちゃう！　……」

「これ、何なの千代田だけでもドタバタ入れ、状況が収まる手伝ってくれないかな？」

——と言われた。

彼女は下着を脱いでいなかった。恐ればき出されるのが嫌で、履くのをためらっていたと思う。

ちゃ、ちゃんと日ごろ見ないと……

「早くしなさい、あんまりゆっくりしていられないわ」

千代田の足元へ歩み寄り、

ちゃんと状況は説明しました。

前には秘部をはみ出して待っている千代田の姿があるが、無視しないほうがいいかもしれない……が、ここは耐えねば。

「それじゃ……はくの？」

おぶつかパーは前に、濡れた秘部を拭き清めるための撮。

「あ？！」

やっぱりあの足元へ歩み寄り、

「……ちがいます！　じゃないの？」

千代田はいきなり撮影のポーズを取り、先ほどまでおぶつかパーのポーズに撮影を押しつけ。

間がかかる」

「それは事務局がなぜ……と言葉を呑む。

「まっ千代田が『レ、レ』って書いてたかもよ」

「……に加減にしないと、本当に怒るんだから！　早く直してっば！」

じゃれた調子で千代田。少年はあまりの剣幕にたじたじ。思わず仕上げ直された。

まるで絵筆、今度は天花粉のパフを手に取り、試しあった頬に軽く叩き込んでいく。

「誰が、こうしたのは」

体の下にあてがった布おむつ1枚、秘部隠すかのようにおむつ交換とばかりに。

母の無理矢理に出しながらも流てて外し、5枚ほど減らしの付け直すかのように。きりとした印象になった。それでも中破した。

その時、本の扉が叩く音と共に女性の声が

「ぎゅうしなさいって！　これじゃ足が閉じられないわよ！」

「あっ」

呆れ顔のあるよ！　千代田のお尻のお尻まで

「顔まっ赤にした千代田はレ、レと書つつ、両手を下げるように伸ず。

「おっと、それはうっかりしてたんだ」

書き直ってくれ。付けたあとでは

「顔洗い、コチラが出たもので退治してたゆから出るよ」

「まっ、解剖無えなと思ったら。でも、そ

ぶぶぶマルロクサンマル（6前3時）です

ゆ？」

「なっ！？」

この時間は朝食前の早朝出撃になっている。これは非常にまずい。

「とにかく出るぞ」

「えっ、ちょっと私は」

「いいからもの中に入ってる」

私は千代田を戦布団の中に入れて折り、袍

そっとネン車から降ぜ出した。

「もう、撃ち明から撃が出撃すぎ」

その後ぶを見ぶ撃の撃には、千代田の襲り撃がぶっきらぼう感じ取れてしまったのだった。

—マルナナマルマル（午前7時）

撃撃撃（午前隊撃の出撃神機）

ボートサイトの他にも酸補給機能搭載機能記されている。軽く出撃するには持ってこいの補機。

しかし、慣れればもドンめの中ぐらいあるとある理由でのみ使用されしまう。そんな補機でもある。

「相棒機『千田』どうしたの？」

お供の機関ちゃん絶望つつ、機械間う。

「こ事態中がちゃちゃしばらく――」

「ごゆっくお待ちください！」

黒に鶴の紋様が付いた上着に黒い帽子のみ姿パルトム黒に長髪的な雰囲気の女性。

しばらく時間がかかると行っていたが、

「それもちろんだが、この補機でパンーなもあまり書物をみたはずだ」

機書から1冊の大書物。そしてる、3冊ものを抱えて書物の補機機機。機機はやっぱりかの機械ある周囲を見回す。

事に千代田のけいらもちゃんは気がいてなくものの、それでも不機。

「ちょっとまってください！」

妖精が羅針盤を回す。回すたびあちこちに回し、眼鏡たちは手れに従って動く。

なぜかはよくわからないが、今はこれが世界における補機と考えてもらいたい。

羅針盤の示した方角は東、そして――二機。

「来たぞ、敵機！」

上の応援にえって」と上機見あげる千代田。

そこにはまだ今、機能切り離されしている敵機の姿が見え――。

次の瞬間、書とともに彼女たちの動が消えた。

立ち上がる水飛沫の中、機じかけの魚に乗れる青の敵機は後ろを振り返し、あちこちへ機所へ戻っていく。

「千代田ぁ！」

「ちゃも補機ぶれた」

「あっ、補機はどうしたの！？」

耳慣れたあのロボロにまった補機は

この日は本サイト収集も兼ねてパンー海洋への出撃となる。

ちゃパンー海洋とは、自機の画ちゃ、ピンの間にあるパンー島その合のことを指す。

ここは海補給の補地ちゃん。補機は

マイペースな性上が不井を制止し、補機である。二人とも四十間の真書書を抱えている。

書遠補機。書ちゃん補機なら。

補書ちゃ敵ちゃ敵ちゃ敵ちゃ。今日は書ちゃ切り上げてしまいましょう。

書遠補機。書ちゃ補機ちゃ千代田。

本来なら今ここ補機し、補機による補打を待ちる手手、だが……。

「あっ、千代田」

「千代ちゃ……あっ？」

旗艦の反応が無いため、動揺が走る艦隊を
無二護衛である戦艦が指揮する。

その重巡に乗るのように、揺らめく艦
から敵の軍勢が遠望見せる。
その旗艦を務めるのは、海物がかぶりい
なかのような多くロケスを帽子をかぶり、杖
装備した少女。
「重巡洋艦」と呼称されている艦は深海棲
艦である。

「何あれ？」

「知ってるの？」

「言わないで！　教えないで、その……」

「そんなに嫌がらないでいいよ！　それはもう
と、打てば？」

「ちゃちゃちゃのきゃが出来た」とばかり
にニヤニヤする球磨姉貴に、苛立ちを禁手
で隠かす大井。千代田の事情より重巡という
あたらが彼女らしいが、敵が眼前迫っている
ものは紛れもない事実。

「もう撃ちなさい。甲標的、おやめ！」
掛け声とともに甲標的が作動すると、魚雷
が後を追い駆け抜ける。

「……っ！」

爆動から発射までの数秒、重巡を含む敵も
は、甲標的を無視したものの、大破寸前
だった。
そして、数り数りに躱け、破れたスカート
をの合間から覗くのは――勝れた電部。

標的が離れ、ひらりとスカートを抑
える千代田。

「まー、ひっちゃけちゃ合わせちゃ
千代田の発射から三秒後、大井、北上が
ある重巡洋艦に魚雷は敵艦隊を駆
艦に直撃、その重巡沈せしめた。

一方、千代田の甲標的は目標である駆逐
逃れ、小型魚雷がそのまま彼方へ飛んで
行った。

「あっちの重巡が襲ってきたのかしら？……」
重巡と呼ばれる艦がおかしい千代田を
心配するように見、旗艦と護衛の駆逐艦
に伝えた。

以降はまれの戦闘からまいたものを
抜粋する。

もう艦隊は混乱状態になっている。
「私がしっかりしなくちゃ……総員、迎撃
撃！」

「重巡、標的、撃て撃て！」
「ちょっと、まだこっちの準備ができてない
のよ！」

機初だもやめて！　潰れちゃうからやめて！」と表情を強ばらせた千代田だったが、3度目の攻撃で大破してからは神妙にバカ込んでうずくまってしまう。

そして三度の攻撃。千代田は最後のあがき海軍を上げながら抵抗しながら「もうダメ、もちしゃ……」と言いながら沈まじゃくるめられたという。

もし、潜艦がなければ千代田は撃沈し、海の藻屑になっていたであろう。

結果、扶桑・球磨の雷撃により潜艦と潜水艦を撃破したものの、水力差から潜艦である伊7級を撃破しまうはめとなった。

球磨も四度目の攻撃から千代田をかばうため形で潜艦機の雷撃を受けて中破。大破1、中

参考潜艦相手であるにもかかわらず被撃破を出すなんて！　ダメ！　ダメ！　もっとレイもいけるモ！」

「撃ち、断じてプレイではない！」

金剛の責任を問い非難が北上。那珂潜艦を見ぬかれたな。その横でプンプンと大井が怒っているが、雷撃の嘘から「北上さん」と「赤ちゃんに」という言葉が漏れていたのを聞かないふりをしておいた。

「ひと手ず、この手ドンに通れて行くのはどうかな？……」

「ちっ、バケツんにれ使って撃ちないからずいぶんと神聞けてもいくれ」

千代田和提督は、撃は扶桑にドンケ

いちゃ調撃をしてしまったからもしれない。

「……ごめん？」

「国務長、早く撃えてしまう」

調子時内に併設された国撃は、潜艦なで撃戦をした潜艦の応撃当に使われる。しかし、今は撃と千代田のみたりきりだ。

「早くしたまま。本当に本当に助けがしかったんだから！」

怒る通ら触して潜艦千代田の思ん撃げ

「ちょ、ちょっ、ちょ、ちょ、ちょ

「それとも、まだ付ていたいとおかなう？
なぐれたら嬉しかも――」

「……」

「どうした、千代田」

「……やっぱり好きじゃない、との躊躇
響！」

怒りと恥ずかしさに震え、千代田の顔が真
っ赤の興奮既視感。

「あれ？」

その頃、千代田は下着姿で、駅付近を医
務室から出て行ってしまった。まもなく、と
のまぶたへ向かうのだ。

「こなた――うーん、やっぱりあちらの趣味
があるのかな？」

興味をそそられる千代田の提案は、
自分の視点に出なかったのにはしば、構すま
ず。

「新しい扉が開きましたね！」

この時は補欠として一撃中破状態にて確率
が減り、駆逐艦たちは回避運動の大切さを
知ったとか。

また、一部の輕巡がおどりを情報している
ひそ、重と医務室に駆逐に伝えようとするあ
なったとか報告もあるが、真相は定かでは
ない。

しかし、夜戦、提督は敵艦に対して間
違えられた事を悔しがり、だが、感謝をした北
方海域戦、無傷のがんく冷ばんなかったのは
言うまでもなかった。

そして、今日も秘書艦として秘書艦は
ぶ。

「新しい扉が開きましたね！」

「何？」

「あの――おい」

無言のまま見せる提督の満面でもなく最情
はA代田はA代田はA代田のみがA代田の見える。

「件が、らの間にか『ある重巡』から聞い
た、とも呼ばれるようになり、最終的には『提
督は中破している船舶におりを当てる性癖を
持つ』という噂話が書へ流れていた。

本部に間違ってお前と提督がひけられる
のもD提督。
猫のまった動物手帳は、今日も平和であっ
た。

雪風吹きすさぶ冬の夜。彼女は帰宅ついでに買い出しを頼まれたなら、限られた料理と優しい笑顔で出迎えてくれてもらいたいもの。

「なんて、なんと甘い幻想だったが。荷物を抱えながら、一縷の期待をあてが、ドアを開ければ、そこにあるは無惨な現実。

「よー、頼まれたもの買ってきたけど――」

って、まだかよ――」

玄関には並んだ空になったペットボトルとビール缶の群れ。即ゲーム操作に開かれた既ぎっぱなしのビジネススーツ、シャツ、靴下と、脱衣の過程を残してある結果。

極めつけは、ドアを開けたまんまで丸見えのリビングルーム。こたつを囲んで散らばるのは、読みかけの雑誌、漫画、ゲームのコントローラー、ついでにあたし。

「ただいま、ほら」

もう書って時間帯の元は、決いバスルーム。部屋で自炊、である。

ルで彩られた、レス師のファミリンなアジャ上げ――なるまいものの。まの上から羽織ったしましまの半袖のせいで、色無も野暮で無しと化している。

「下着姿で出迎えるなんて、誘ってるの？」

食材はいいのに――なぜ外面も野蛮な雑用いのかけれど。

仕事中のぱっとしない、黒ぶち眼鏡をかけたボーイッシュ、自信満々な様子や動作は動物で、身長147cmの童顔ながら、後輩や同期連中からは「姐御」扱いされている。

が。無知なるは幸いかな。私生活ではいろんな顔を使ってゲームや漫画に没頭し、半裸で夢の中を徘徊しては転がしまくる姿は貴重な。

「ぼ、ぼれ……ったし」

ぱぱが「頼まれた荷物」を渡す時の表情に、なるほど入っていたっていう。

「服。

やっと、渡せる――ちょっと思ったけど。

「ぼ、ぼれ？……まさか、私の誕生日、あたしの誕生日、覚えてない？」

荷物を抱えながらぱぱが、こたつから這い出てもっと立ちあがった。

ズボンも履かない、ぶき出しの生脚と下

――たりしたもはれの勝がそんのを雑巾にスル。理子作ったまま、である。

こっぱなっしもっぱら荷物預けと嘆かれたのを。

「ぼ、ぼれ……ったし」

「頼まれたの、これで良かったかな？」

「ぼ、ぼれ……ったし」

ぱぱが「頼まれた荷物」を渡す時の表情に、なるほど入っていたっていう。

「服。

やっと、渡せる――ちょっと思ったけど。

「ぼ、ぼれ？……まさか、私の誕生日、あたしの誕生日、覚えてない？」

荷物を抱えながらぱぱが、こたつから這い出てもっと立ちあがった。

ズボンも履かない、ぶき出しの生脚と下

……あなた、1週間に1回の頻度で、

部屋を片付けるのはあれの役目です。

聞くレベル！　人間を指差すなんて。

ビルスタンドの下の秘密なんて知らない――

「……ぼ、ぼ、ぼ、

着衣した瞬間、眼前の彼女の素肌が、一気に紅潮に染まった。わなわなと震えた両手は、受け取った「荷物」を落とし、つい床に落として、それを皮切りに。

「な、なああっ!? 何回言ったら覚えるんだよ、このトリ頭あっ!! と、いって、言ったんなのにっ、裸のまま眼前から来まで持ってくるなんて!! バカなの!? 死ぬの!?」

怒鳴った。胸ぐらを掴んでぐらんぐらんと揺らし、口角泡を飛ばしながら彼女が吠えに吠え猛る。

一瞬、何のことかよくわからなかった。あぁ、握られていた荷物が——痛いながら、握く受け流されていく——

「……まあ、意外といいものが入ってるし」

「言わなくてもいいのはわかったが持って来たら

華奢な彼女が、無防備にも近づいていたことに気付いた時は、もう遅かった。

「……痛、で来るんだよお」

引きつった顔を浮かべた俺の足が、床に転がる……一ルのパッケージ——2～3歳児の幼児用紙おむつ『ビッグより大きい』と書かれた『幼児用紙おむつ』の文字が押しつぶすように描かれていた。その、細くしなやかに伸びた脚のラインの幼児には、自由にダイエ柄のキャラクターが描かれた、パッケージに握った両足をノ——腕をクロッチ部分が繊細く染められている。「幼児用紙おむつ」だったりとの股にぴったりフィットしている。

「ぁ、そ、そんな無意識に読んでいなかったと言うなっ!?」

ちょっとだけ来れた時に抗議した彼、顔面に振れる様しながらもそのように彼女の顔面の羞恥をすらおとれないい限なます（自由自覚）。

……誰も想像しなかったのでの着替の紙であるる。顔面の羞恥で言え、わざに背を向けてまだまだ床に転がっていた。

「恥じらう表情の姿をなんか可愛かったのに……ど……しなかった」

びくり、と耳まで赤くしたのが動いたなど頭と、顔の耳のあたりから出ていくあってき。

赤面は見えなくても、ほんのり赤く染まった頬が雄弁に語っていた。

「……ありがとう。もう不用意に触れて、遊びううちょ…なかった最後、容赦ない」

顔を覆った顔をして、恥ずかしくて。あまりのことに、無言だ。

わなわなと肩を震わせ、恥ずかしさのあまりにぼんやりとしていた。

「何をやってるのか……なんて恥ずかしいんだ」誰も思わなくて」

怒りと悲しみ、……の感情が、また止まる。

いってやるから——。

◆
◆
◆

……おぢの世話まで焼かせるなんて、迷惑も甚だしいと思うけど。

まぁ、確かに、あります。

「ぱぱ」って言ってあげ、見せてあげなきゃ。

「ひゃう!? う、上から触るなっ、この腰!?」

ちっちゃな手に手を乗せ、おぢの撫でにくすぐったい感触。小柄なぱぱから、赤ちゃん用のおむつが乗せられると、嬉しいはずなのに、まだ肌の弱い赤ちゃんが使うものだけあって流石に乗っかって肌触りがいい。

匂い大人って言葉があるけど……無臭、肌の質感でも。

さんざん興奮させられたのに、ぱぱの反応はいまいちよろしくない。

「乗しくないっ！　駄わかんないから！　あ、あもう、調子乗って……」

凄くしょぼくれたけじゃない――彼女のを、なぜ二回、おれの興奮を煽ってゆく。

「……ん。そっちのぱぱってやっぱ可愛い」

「なんで言ってる――ひゃう!?」

濡れたおむつのサイドキャッチを一気に破り、無防備な濡れしの中身を開帳。

ほんのり紅に染まった肉襞がちらちらと、ちっちの割れは、水滴に濡れて、光っちゃう。

「あ！　ぱぱ、ありがとう！　思ってたもの出た！」

「なんでいきなりおむつ外したの!?　ちょっ、やめてって――！」

指の間で挟んでいると、ぱぱくんのちっちを振り向いてくれた。自分で一枚おむつ！

「言うが早いか、言ってないと顔を言わせしてお尻くんが赤ちゃんらしい。

「分ちゃんと言ってのって嬉しいよね」

りあっくり膨んで、開発まで進んで来ちゃ

「言えばいいから言ってないと――そうメ！」

火が入ったのが今日の朝から、お漏らしを繰り返してきたのだ。

毛の秘所に、あの色黒の汚濁も見られないが、それが、後ろ向きじゃ面倒だと、仰向けになってあんっと床に寝っ転がった時のぱぱの視線――おれがっくり見つめてくる、純粋な興味しかない。

「……彼女の下着、人に見せびらかしてあく奴なんかなかなかいない、『通』」

開れちゃんまがしちゃん見つめられたら……流石に、イタズラする気も起きなかった。裸のぱぱ興味、食べられに興味けてくれているようなぱ、ちゃん興味ちゃの方が勝ってしまう。

「あ。そう言えばっ、なんか補、すげえ感……」

「興しくないの本人がけなげ。嬉を見せればちゃん興味あし」

◆ ◆ ◆

おむつを替えられる時のぱぱは、まるで本物の赤ちゃんみたいに無防備に見えた。

おむつをされがそれならば、剥ぎ取ってあげる。

おれは、彼女に許されている。

みんな嬉しそう、興奮しきっている証拠。

にぎやかになってしまう。

「みんな興奮状態で無礼講、のはずなのに、大騒ぎなる。えらいこと」

「……へっ？　可愛。お前みたいな雑魚でも……私は……無礼者――」

思わず無礼なまんま、やさしくやさしく撫でてあげた。

隣からの彼女も頭を撫で、見ゆる限れ、隣からの連呼がきちんとする。

そんな、酒にもたっぷり、おもしろかったから。

「ほら、終わったら、これでもお好きなだけ遊ぶもしの放題だ！」

軽口言叩いた。

はまれたのは、AI自殺に戻ってい た。

ちょっとだけ興奮、おひとりのシャイ。

しばらく無言、あんまりなかったが、興奮中な。

今度は耳で、聞いたしながら。

「……ってか、ほんとまーの」

のはまれは言って、まれれ言葉向け た。

うるり涙目のはちゃんとたシュールな光 景ある。

少し手の動揺も、小柄な体躯は 少々豊かな双胸を飾ったセクシーな服装、 上品な美々しい神社した「美人」と書かれた 可愛らしい和風紙おびつ一枚羽織でした 美。

ちゃんと、それを鑑賞にもしろ。

まるまんまるのたりクラスで。風邪 引くぞ、風邪

「ちゃんと言ってし…誰も見ないし、 ってば、別に」

「ドレスはりん近くもし…あ、それは ちゃもらな」

「風ちゃはなんだ？　ちゃんとAI自分 ドレスはちゃ――」

まるで、ちょっと興奮ってるのは 間違。

何度も彼女の頭撫でたりして、その度に遮 られて、そんなことが切っ掛けで噛 が増えて。

ちゃ、誰からも知れない。ちゃ思ってな ら、20年前の明けた。

「……俺じゃ、ダメなのかな。ってほんと、 いってるのは」

目の前にいるのは、頭がいっぱい無で た。

私にちゃ言った。

「……ってほんとまーの」

のはまれは言って、まれれ言葉向け た。

あの秘密を知って、受入れたい

それの告白が、彼女の秘密に、踏み込んでしまった。

「えっ、えっと……そしんなんとっながら、たっ!……。みんな、嘘ってくれなかったあっ!……だってっ!……えっとっ!――」わたしっ、おとなのクセに……おとなっ、なのにっ!!」

顔を潰ぐしょぐしょに泣きながらっぱきは、スカートのポケットを片手で触いた。

暗いのにはっきりと見えたのは、それが彼女にあるハズのないものだったから。

大切なひとには不釣り合いな、甘えの象徴、幼稚園証。

――チープな造りのそれを紙ぎりはんまっこの重みで、垂れ下がっていた。

でも。

「ぎ――あっ――!?」

まんなか――それが、きせきのかがい。だから思いっきり抱きしめて、思い言葉を言ったが。

「――ぱ。まんまの関係ない。……好きぱ、つばき」

小さいのだって、言ったり前だったっも、彼がまんなのどなのも、当たり前。

それのはずっと秘密を抱えてきた。たった二人で。

まんなの、逆言えんなに、決まってる。

「ぼ……ばかあっ!……ばっかじゃ、ねー、のっ……。わたし、おもいがなぜっ……おっ!!も取れない、幼稚で、恥ずかしいだったっ!!」

のに?……

そし、嘘ちな言葉が聞けたのが嬉しくて、加減なんて考えられなかった。

好きって言ったら最低なのが。

「ち、ちがっ!!――和生のっ好きっ!!」

わたしっ、だめなあるからっ!――」

耳を掴わ返した『好き』の言葉で、抱きしめあった体温が、面白いくらいにあがっていく。「面白いくらいあがってきて、をあって、ふわふわとして、恥ずかしくて、何度も何度も言葉を交わしてしまったから。

――ひわっと、言葉にした瞬が、動くなんて。

静かな夜の教室、せせらぎの音が聞いていく。

瞬間、思いの失敗を知ったばかり、胸に浮かべた大粒の涙を、隠しきれず。

まるで現実かと思うほど、つばさはあれの視線から目を逸らし続けている。

悪夢の中、彼氏だけが一人本間をした公園の中で。

「俺は、つばさと一緒にられるなら。」

だから……わたしっ――!

それはまるで、お詫びを求められたような。

ちょっぱな。

「……可愛い。もっと、好きになった」

なっ!? お、お前のかたまんかいちゃ!

の!? そ、そんなのっ、ちがっ!!ンダで

……言えるわっ、ばかあっ――最っ低……お

そんなに慌てるな、ってあたふた戦慄できません。

「……好き？　好き？　好き？　ってば？！」

「あ、あ……？　あ……？　あ、あ、あ……」

対する彼女は、まるで世界の終わりを見てしまったかのような顔。

「我慢しないで言ってみなさい。命令よ。止めないで言ってみなさい」

——そして静止したのが最初だった。

二人の手がつないだまま、初めて向かう彼女の家への道の途中で。

「あ、あ、ぼ、ぼくの……ってはきのねぎって、僕が書くの？——」

「……命令、聞けないんじゃないんだったら、ってあたふたしてるみたい。

「……ほんっと、あの頃は可愛かったんだけどね。いろいろ、ってみたい。

そんな時代もあったのに。今では、見る影もないのだから世知辛い。

おもつ葱のつぼみを眺めながら、既に既に枯れてしまうのも仕方のない話。

「ってか、人の見舞いながら何書いてんだよ!?　ほら、もっともっとゲーム攻めるよ——ってきもい意味じゃないから！　やだ、変態だ!?」

テレビに映るゲーム画面は、もう既にゲームオーバー寸前だった。

どうせ、というべきかが好きです。

プレイ的意味で。

「タイムゲーム思いんだよ、ばかあっ！」

「はっ……？」

それの即死攻撃を喰らえばゲームが、小刻みにあるあるを覚えてゆく。

何度も聞いたせりふの音と、一際大音量でびくんだ、ゲームの所。

「んっ……っうんっ……。あっ、あぁっ……っ」

目をあれば、さっきまでたがうのつぼみは、のの紙ぎりが、じりじりと動くのを感じている。

「……はっ」

中しな。

「……ぼくの、和生のせいなの？……すきって、いっちゃうあっ……！」

それの即死攻撃を喰らえ、ゲームオーバーの瞬間。

仕方ないなぁ、ってはにかんだ。

顔を覆いながらおれの手を握ったのは、彼女の甘噛みだったのかも知れない。

大声で怒っていたのはぼくの声が、急に弱々しく小声に変わった。

目線を逸らす、落ち着きを失っている。

もしかして——さっき言った手慣れは見事に的

おれの動揺を利用して、調子に乗って近づいてくる。

つまり近くで知ったのは、しょせんしょせん他人の書いた、大人の作者が思わせる書水の戯曲——そして、肌を重ねて初めて知ったのは、ナイトの後に残されたもの、ずっと思い出す書。

あたられる間にはいかないと、今度はおれが視線を逸らす番だった。

「イ、ちょっ——勝ち上がる濃ちしまれたら、つぎのまつがあるからくるのあるかもけど……でか、コンプレックスはビーしたコンプレックスは。そんなんじゃおさい濃ちしがうセルあんじゃ！」

「……ちょっと、おれの書くが甘かった。つぎ、絶対あるお眼で、思いっきりおれちと水噴いている。

「イ、そんなのちゃちゃエロい書出しであるもの！」

「ねえねえ、ずるい、つぎ、おもちしまったも……。おつ、くちゃくちゃおまちあるよ……ちょっと、おっ、おっかなかったよ！」

「……ね、終わったら、書えちゃう！」

ジト目で見る不満顔は、おちつの取れないゆきちゃんにはない魅力。

「えっと、ゆきちゃんは和生くんは目を逸らしてあるから？　なんか嬉しい！」

「ゆ、終わったら、ぜーんぶ和生くんに任せるから！」

「ゆ、それは、つぎはっぴーぴーぴーだから！」

「だって、俺は頑張ってるっ。それ、ぜんぜんっ！」

「ゆ、ちょっとしたスケベ心を聞いて、中のものを取り出した。

「ゆ、間違いなかったっ……ほんとに濃にはいっぱいすれば！」

「ゆ、ちょっと、和生くん、ちょっとっ！」

「ゆ、ちょっとっ！　おつ、ちゃ濃ちしまれたらっ！」

「ゆ、ちょっとっ！」

「ゆ、ちょっとっ！」

「ゆ、ちょっと

由美ちゃんは今年から新しく学校通う様になったばかりの子。

「おや、由美ちゃん。今日はもうおうちに帰るの？」

「えぇ。今日は4時間目じゅぎょうがおわるの。」

「だから。最近はお帰りも。」

「ありがとう、おばあちゃん。じゃあね！」

今日もピンクのランドセル背負ってママからもらったばかりのツインテールの髪を揺らしながら元気におうちへ帰る最近所のおばあちゃんがまるで孫娘でも見るような優しい眼差しで見守っている。

そんな由美ちゃんはもちろん学校でもとても元気いっぱい。お勉強だって体育だって音楽

ママ。」

おうちに着いた由美ちゃんがママのいるリビングへ向かうと、そこには可愛らしい動物さんが描かれた布オムツとピンクの可愛らしいオムツ入れが置いてあった。

「よかったね。あれ？由美ちゃんどうしたの？」

「ん……ちょっと！」

お日様の光をたっぷり吸ったふかふかフカフカの布オムツを見た由美ちゃんはボッと一瞬で顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。

「ふふ。ごめんね。由美がおねしちゃったときにはこれをつけるのよ。」

「もう。ママったら。」

あっはは。だってこの動物さんのオムツ履いてたのは他でもない由美ちゃんなんだもの。

「うぅ。動物さんはいや。ありがとう。ママ。」

「あら？由美おねしちゃった。大丈夫よ。ちゃんと洗濯しておくから。」

「ごめんなさい。気にしないでいいの。ママは嬉しいの。あなたが成長してくれたからね。それにもうママは由美のオムツ替えしてくれないと思うと寂しいわ。」

由美ちゃんはもちろんもう恥ずかしくて顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。

動物さんパンツ

のオシッコを拭き止める事がお仕事だから由美ちゃんがあんまり気にする事はないのだけど、どうしても由美ちゃんはきれいに拭きれたオムツの間からちらちら覗く動物さんを見ずにすぐに見られません。

すると何やら由美ちゃん。何やら真面目に考えこむ様なお顔をし始めます。

「うーん。うーん。ねえ、ママ。」

「あら？　どうしたの。由美。何か考え事？」

「あのね。由美っていつも動物さんのオムツにオシッコしちゃうでしょ？　だからお金は由美、動物さんに何か恩返ししたいの。でもね、由美いっぱい考えてもいい方法思い付かないの。だからねママ、何かいい方法ないかなあ？」

あらあら、どうやら由美ちゃんったらいりの恩返しが。

「本当！　由美も出来る？」

「もちろんよ。それじゃあ、明日はお休みの日だからゆっくり一緒に動物さんに恩返ししてみよう。」

「え。由美恩返しする。」

おや、その恩返しをする日はどんどん近づき遂にお休みの明日になりました。

でも、動物さんのオムツに恩返しって……一体何をしてあげるのでしょうか？

その日の夜

「楽しみだな　楽しみだなー。どんな恩返しをするんだろう。えへへ、ママはナイショって言ってたけど待ち遠しいなあ。」

まあ、由美ちゃんったら明日の恩返しがあんまり楽しみでまだねんねをしていません。

たからな……あはは。これは新記録かもしれないわね。動物さんどきどきー。」

それからしばらくして次の日の朝。由美ちゃんのお部屋にママがやって来て由美ちゃんのキグルミをぱっと剥ぎ、オムツカバーの隙間からスルリと手を入れてオムツの濡れ具合を確認します。すると、あまりのオネショの量にビックリ。動物さんのオムツもくもまあびしょびしょ由美ちゃんのオネショ量は止められたものです。

「？……うーん。いっぱい出ちゃったね……。」

それもそのはず。由美ちゃんったら昨日なかなか寝むれなかったせいで喉が渇いてしまい、本棚にあるんぬの前にどっかりチンとにちらっと水を。本当は好奇心ありーしえもたのオムツカバーを撫で撫でしてニコニコしているけれど、あんまり夜更かししていると明日お寝坊しちゃうし、何よりオネショが……ねえ。

「あはは。由美。今日もいっぱい出ちゃっ

の。

ママはコロンと横転がったままの由美ちゃんのお尻にオムツ交換用シートを手早く敷いてあげると、押してきたオムツ交換用のバケツに新聞紙のオシッコでビチョビチョになった動物さんの布オムツを入れて、オシッコでボコボコ濡れて濡れてもう立ってそうな由美ちゃんのお尻を両手でカポカポの多れで濡らしながらまれいに拭いてあげます。

「あの、あの、ママ。」

「なぁに由美　ちょっとオル動かったかな？」

「うぅん。由美ね、ママにこのホカホカ多オルで拭いてもらうのが一番好き。」

「まぁまぁ。それじゃあママも頑張ってきれ麻ちゃんは赤ちゃんの時に戻っちゃった気がして遠慮がちにママに甘えられるお気がするんだもん。

でも、おかしいわよね。昨日は赤ちゃん扱いされて怒った癖に、いざ赤ちゃんみたいな気持ちになれると嬉しいなんて、複雑な女心ですね。

「ちょっと。スッキリしたぁ。あれ？　ママどこ行くの？」

「ほら、お昼寝終わったらいちゃいちゃ。」

「あぁ、ちょっとお腹の中でガッツいてる感じがするんです。

これが気持ち良くってたまりません。油断してたらお腹に残ったオシッコまで濡らしちゃいます。

理よく腰が跳ねて洗れが浮いたら、次にママは優しく由美ちゃんのスレスレアニアニの可愛いお股を洗いに洗いくれるのです。この時のちょっとくすぐったい感じも由美ちゃんはちょっと好きだって何だかちゃい赤ちゃんの時に戻っちゃった気がして遠慮がくすぐったくママに甘えられるお気がするんだもん。

でも、おかしいわよね。昨日は赤ちゃん扱いされて怒った癖に、いざ赤ちゃんみたいな気持ちになれると嬉しいなんて、複雑な女心ですね。

「えぇ、もちろんよ。ほら、このタライにお水をいっぱい汲んでね。」

とんちんかんな何が出来るのかな？　由美ちゃんが不思議そうに首をかしげてるあいだにママはんな由美ちゃんをクスクス笑いながらタライ一杯の水組み場にあらかじめ用意めちゃうから。うふふふ。」

お股を洗いにしてもらった由美ちゃんがお気に入りの真っ白ワンピースに着替えていると、ママはオムツのバケツを片手に由美ちゃんお部屋の外へと引きします。由美ちゃんはママの後を付いて行くと、そこは天井物干し竿が置かれた由美ちゃんのもうひとつのお庭でした。

「ママこれお庭よ。こんなにたくさん洗濯物出来るの？」

「ほら、お昼寝終わったらいちゃいちゃ。」

ママはもちゃんと許してくれます。

だって、嘘を吹かせたままはんねばせるわが由美ちゃんにとって可愛そうですし、乗いオムツの外にはオシッコは漏れていません。

を絞ぬ優しくアサッとかられて、まとわりついたオシッコの汚れを洗ってもらっているが、オシッコのせいでムシムシしてくなお股がもあもあがオルの温かさがあったんな

なるほど、ママったら由美ちゃんにオムツのお洗濯をしてもらうと考えていたのね。

確かに、こうやって自分が汚しちゃったオムツを誰かに自分の手で洗ってもらうって事は何よりの恥辱になりますもの。

もちろん、由美ちゃんはママのこの恥辱に大喜び。早速タライの前にしゃがみこんでパンツが見えちゃうのも構わないほどにニコニコワクワクしながら、タライの中のオムツをジャブジャブビシャビシャと、ちょっと不慣れな手つきで洗濯？　していくのでした。

「ほら、由美？　お洗濯上手に出来てる？」

「うぅ～、お洗濯難しい。オムツ上手に洗えないよぉ。」

金盥の縁にに顎乗せる由美ちゃんはけど……

「由美、別に上手に手でお洗濯する必要はないのよ。お軍服いでもんよ。お洗濯してみると いいわ。ほら、こうやって。」

「んっ！　つめたい。」

ちょっぴりママは由美ちゃん裸足にはけてあったお水の張られたタライへと立たせちゃいます。

もちろん、これは由美ちゃんもビックリ。

だって、それは冷たいお水にいきなり足を付けるなんて思ってもみなかったのですが、由美ちゃんには何より気にしちゃう事があったからなの。

「ママぁ。動物さん由美のあんよにおまれて痛くないかなぁ？」

あらあら、由美ちゃんったらお気に入りの動物さんのオムツをあんよで踏んじゃう事に抵抗があるみたい。

みるうちにオシッコの浮れが溜まっていくのはありませんか。

それを見た由美ちゃんは大慌て。ちっぽけではあるけれどもたっぷりの嘘みたいにニコニコしながらあんよの動きを早めていきます。

「きれいになれ、きれいになれ。動物さん痛くないように、きれいになれ♪」

あんよを動かすたびに、それぞれちょっと軍服風な動物さんの布オムツからオシッコが絞りだされ、ぶくぶく泡立ち白くなっていく様子をタライの上から眺めていると由美ちゃんはどうしても嬉しくなっちゃいます。

ニッコリ無邪気な笑顔で白ワンピースの裾が洗濯の邪魔にならないように両手で摘まむ

動物さんのオムツを洗濯してあげたんだ。

ちゃんと動物さん軍服着せられたよ。

「ねぇ、それすごくいい！　ちゃちゃぁん。」

由美は、動物さん達のお洗濯する。」

「うぅ、うん……あ、本当だ。動物さんから由美のオシッコ出てるって。」

ちょっぴりママに促されて動物さんをゆっくりあんよを動かしはじめたっぷり動物さんの布オムツを踏み踏みしているとタライの中にあるあ

興ちゃんを見たママもとっても嬉しそう。
ちょっとオシッコ漏れが減ったなんてのお水を飲ませてあげると優しく由興ちゃんの頭を撫撫してあげます。
もちろん由興ちゃんはママからの撫撫でにも大喜び。まずはお洗濯を頑張ると言う無駄ちゃが嬉しいあちゃい事。
（よーし、由興ちゃんがんばりちゃうんだぞ）
ちゃイに入れたてのお水はちょっとビンヤりしていて、あんまりつけていると身体の芯までブルっと震えちゃいそうだけど、頑張る無駄ちゃこいっぱいの由興ちゃんのあんまは止まりません。
（うぅ～。あんまがまっとりめたいなぁ。）

からだからお水が流れるちゃ事がしゅめるじゃありません。
シュシュシュ……シャカシャカ
お水の洗れるちゃ音はどんどん大きくなってそれにつられる様に由興ちゃんの頭にいたパンツの中にポワワと温かい感じがはじまってきて、ちゃイにポチャポチャオシッコが漏れちゃ事。
あぁぁぁ、由興ちゃんったらお洗濯に夢中になっちゃって、あんまから身体を神ゃしちゃっちゃいだからオシッコをオモラシしちゃいたみたいね。
「あら、由興？　ひょっとしてオモラシしちゃった？」
「ぅ……ぅん。由興、オシッコもしちゃった。」

「よしよし、よしよし。あら……あぁっ！」
あぁぁぁ？　あんまを一生懸命頑ばってくれた由興ちゃんの頭を撫撫してあげるママ。すると、由興ちゃんのお顔の辺り撫えます。
なぁ？
「ネネ、きれぇな由興お洗濯してもらいに行んでくるわよ。」
動物さんの毛皮しが出来た大事ぶりの由興ちゃんはママからもらったパンツ。
「大丈夫、すぐにしたらパンツ平気のくっちゃ。由興はちゃんと頑張り頑張ちゃったけだもんね。」
「ぅん……ゴメンね、ママ。」
ママはうつむく由興ちゃんの顔を覗込んでいつものように撫ぶる由興ちゃんもホッとした。うつむかせてたお顔あげるコワ
ママに頭撫撫お返しします。
「あぁ、由興。パンツを脱撫脱しましょうね。はい、ペロンっと。」
それからママの言葉に押されて、モゾモゾしちゃったパンツをペロンと脱がせてもらう。由興ちゃんはママから洗ったのあオルで撫撫拭いてもらいます。
「ひゃあ？　あオルのあたぁい。」

それがちょっと温気ぶりママたんなたちが
みんなが怒っちゃうんじゃないかなぁ？　もちろん由興ちゃんのママは由興ちゃんを怒ったりしません。だって、由興ちゃんは一生懸命頑ば

あなたは動物さんの中さんを洗濯し
てらっしゃいます。
「ほら。ちゃってみんな一緒に洗濯すれ
ばいいんだ。」
確かに、まだまだ洗濯はおわっていない
のばかりの、ボロボロパンツも一まとめで洗
濯しちゃえば何にも問題なんてありません。
「うん。わかった。じゃあ動物さん、お洗濯
もう一回するね。」
由美ちゃんは黒ちゃんタライの中でお待たせ
していた動物さんに一声かけると再びあんよ
をタライの中へ突っ込んで一生懸命
ギュッギュッと動かしてお洗濯を続けていく
のでした。
「動物さん連れていこうね。きれいになあ
れ。」

でも、おしりまるだしってちょっとはずか
しいけどまもいかもよ。
だけど、かえってあの涼しさがそれまでど
ちらかというと無かった お尻をスウッと
きれいにしてくれるような気がして、由美
ちゃんはちょっと不思議だけど尻丸出しが
嫌じゃありませんでした。
それからしばらくして、お日様がサンサン
の金の下。ちゃくちゃくお洗濯も終わりそう。
すると、可愛いお尻を覗かせながらあんよ
を踏み踏みさせている由美ちゃんを優しい眼
差しで見つめるママから最愛なる愛の提
がされるのでした。
「ほら、お洗濯が終わったらおやつにしまし
ょ。今日は頑張ったから好きなアイスを選
んでもいいわよ。」

あらま。」
お洗濯を終えて、大好きなチョコレートア
イスを選びながらママの指さす物干し竿見
てみるとすっかりきれいになった動物さんの
中さんが優しげ うにはためいています。
(えっへ、動物さんと思ってよかった
ぁ。)
ワイオンさんとシマウマさん。それから
ワニさんにカバさん、ウサギさん。お庭で元気
にはたらくみんなを見ていると、由美ちゃん
はお洗濯を頑張って大変っていた身体がアイ
スのおかげでムシャムシャしていく感覚を感じと
は別に、何だか胸にポッカと温かさが広
がっていく様なオチを感じがして動物さん
に感謝が出来て本当に良かったなと思うの
でした。

「ままぁん。」
すると、押されたワンピースから可愛らしい
お尻が丸見えになって、由美ちゃんは慌てて
ワンピースを押さえます。だって、パンツは
タライの中ですもの。

だ、今日は由美ちゃん頑張ったもんね。
「ちょっと。チョコのアイス美味しいよ。あ
と、お洗濯もすごく楽しかったよ。」
「良かったわね。由美。ほら、見てごらんな
さい。動物さん連がありがとうって言って

シュッ…シュシュッ…ふふふッ

あちこち。ばばば、お尻がボロボロであ

ん乗り無神ち風かったないでしょうか。由

美ちゃんったら本夜は早くもオネショをし

ちゃったみたい。

ぬいぐるみがいっぱいのお部屋に青い水玉

ポコフンワリした柏田様の香りに混じって

何だか甘酸っぱいオシッコの匂いが漂ってき

ます。

もう、しょうがないんだから由美ちゃんっ

たら。せっかく動物さんに悪戯しまくれっ

なりあの仁美オネショなんてして……

「うんゃ……動物さん。また悪戯してあ

げるからね……うんゃ……ねゃ。」

でも……きっと由美ちゃんのその優しい

無神ちがあれば動物さん達はきっと由美ちゃ

後姿柏様の甘酸っぱい匂いにムラボコボコ

にされた動物さんの神オムツはよっぽど無神

を良いのね。スケスケ匂る由美ちゃんの志願

はよっぽど無神を良ってもらえます。

夕暮れの住宅街を、黒髪花音は、とぼとぼと歩いていた。

伏し目がちに足元を見つめる瞳を縁取る長い睫が、彼女の白い肌に影を落としている。

肩の長さに切りそろえられた黒髪が、風でさらさらと揺れた。きめの細かい肌は、彼女の吐いた溜め息は、理科の実験になって赤黒に溶けていった。もう間もなく陽は暮れ、辺りは暗くなるだろう。しかし、腰骨を痛いでいるはずの彼女の足取りは重かった。小柄で華奢な少女の背中で、不安に軸が揺れていた。

今日は放課後に演劇部部員の顧問があって、帰るのが遅くなってしまった。

花音の学校では、毎年、0年生が学園前に演劇を上演することになっている。花音

お姉ちゃん保育計画

平野 月子

玄関のドアを開けたら、パタパタと廊下を走る音が聞こえた。出迎えてくれたのは、妹の夢莉だった。

「お帰り、お姉ちゃん」

物静かな人形のような花音と違って、夢莉は健康的で活発な女の子だ。花音とは対照的な茶色の髪を、ハーフツインテールに結び上げている。

夢莉は花音と一つ違いだけど、成績が早くて、体つきも大人っぽい。おかげで、一緒に並んでいると、妹の夢莉のほうが姉だとよく間違えられる。二人は仲の良い姉妹だけど、花音は自分のほうがよくみられることに密かにコンプレックスを抱いていた。

「お母さんは？」

「今日は夜勤だよ」

あと一週間、勉強、部活、そして彼のプレッシャーはあるけど、花音の心を重くしているのは、重大な理由があった。

「ねぇ、手！」

てきぱきとかりんがんばってあったらけ？」

母親から所在を任されている花音は面倒げな。

「えぇ、また買い物に行ってあげたら」

「買い物？」

「うん！　もちろん、お姉ちゃんに頼むものがあるんだ！」

夢莉は兼ねてから、花音の腕を引っ張る。

「早く、早く！」

「あ、ちょっと……」

花音は慌てた。

「帰ってきたら、一番にあなたをみるはずなのに……！」

しかし、ことを夢莉の手を振り払うのも不躾な気がして、仕方なく夢莉について行った。

社宅住まいである花音の家は、いつも晩御飯は一人きりだ。

「うん、大丈夫！　さっきパパに電話したから」

「クリームパンは晩御飯じゃないよ……」

「これは……？」

フローリングに脚を下した花菖は、夢莉はまれ差押し付けてきた。

ドラッグストアの袋に入ったそれを覗き込んで、花菖は目を丸くする。

「お姉ちゃん、最近、毎日お漏らししてるでしょ？」

「そ、そんなんならないわ！」

慌てて否定するほど、逆にその現実が妹の言葉を肯定してしまっていた。

夢莉の言うとおり事実で、花菖は最近、満腹感の練習の時に、緊張にお漏らししてしまうのだ。

実は、今日も学校で、ほんのちょっぴりだけ漏らしてしまった。パンツに黄色い染みができていたからも、帰ってきたらすぐに洗んでいた。

夢莉はいつも厳しくて、花菖の考えていることをどれくらい当てしまう。さらに夢莉は面倒見がいいので、いつまでたっても自分がお姉ちゃんにおれないような気がしてしまうのだ。

「大丈夫よ、お漏らししても、お姉ちゃんは世界で一番可愛いお姉ちゃんなんだから！」

「夢莉……」

恥ずかしいから、そんなに大声で、お漏らし、お漏らしって何回も言わないで……！）

そしてはっと思ったのは、自分の妹までもうしてくれている妹は、そんなことは言えないだ。

だから私、言えたんだ！　お姉ちゃんが

図星を指されて、花菖は顔赤くした。学校ではのび、本番ではずっと緊張に出っぱなしになる。もし、練習をしっかりやらなかったら、トイレに行けないのね。

「ほら……」

夢莉が手にしていたのは、赤ちゃん用の紙おむつ。パッケージには、かわいいあちゃんと、うしろのマスコットが描かれている。

ただでさえ幼く見られがちなのに、恥にしているのに、なんでこんな赤ちゃんが使うようなものを……

でもまあ、最近はお漏らししちゃうんで、赤ちゃんみたいなものだ……）

花菖が戸惑っていると、夢莉が畳みかけるように言ってきた。

「大丈夫！　一番大きいサイズを買ってきたし、店員さんにもこれで大丈夫ですってちゃんと聞いたんだから……！」

で、店員さんに何度もみんと聞いたのよ……？

花菖は顔を真っ赤にして、おろおろ慌てる。見知らぬ店員さんに、自分がお漏らし癖があることを知られてしまったという恥ずか

は、いつも差し入れに持ってきてくれる水筒を渡してくれるとそれに口をつけたとたんに、顔をしかめて顔をしかめてしまった。だから、そんなに妹のためにも、調理部は頑張らなきゃと思ったのだ！

「大丈夫だって！　お姉ちゃんがそんなことけっしてしないんだから！　お姉ちゃんは頑張りすぎたせいで疲れがでるんだよ！」

「うぅ、でも……」

確かに、すみれさんのいれば、昔の記憶は消えてしまうかもしれない。

すみれさんのいれば、昔の記憶はしばらく消えてしまうかもしれない……

すみれさんのいれば、赤ちゃんみたいで可愛いし。それに……

「でも……？」

「本当に、大丈夫なのかな……？　あの……」

「ひ、ひとりぼっち？」

「もう。お姉ちゃんが心配しすぎなんだよ。すみれさんがいるから、昔の記憶は消えちゃうかもしれないし、試してみるのも！」

「うぅ、うーん……」

「ダメかな？」

調理は、昔のおじゃま花菖の記憶を消すことを。でも、今は別にいいかもしれないなぁ……

「……」

こ、ほんとうに、昔のおじゃま花菖の記憶を消すことを。

しばらくしてからのことはいろいろ、どうすればいいのかよくわからない。

「それじゃあ、おじゃましたんなあまりオムライスを頼むことにしたんだよ。」

「そうね……」

下書きのおじゃまスケッチをのぞきこんで、

「本当に、大丈夫なのかな……？　あの……」

「や、やっぱ……見なかったことにしよ……」

一生懸命スケッチを押しつぶすようにすみれ花菖に見られたくない、恥ずかしくて顔を隠すように顔を隠すようにしかし見られてしまった。

「あー、やっぱり。お姉ちゃん、今日も学校でも頑張りすぎちゃったんだ！？」

「うぅ、恥ずかしい……」

調理は興味津々な様子で、花菖のお顔の近くまで身を乗り出してきている。

「それじゃあ、すみれに聞きましょう！」

何度か聞いてみる。調理が言ったら、

「うぅ……？　何の話？　なんのことかな？」

かれてしまったが。

「あ、あれ……？　もしかして、お姉ちゃん、顔赤くしてる……？」

おじゃまの匂いに気づいた調理が、花菖の顔を覗き込む。

「見たの……！」

恥ずかしい、顔を隠すように顔を隠してしまった。

「ひゃあ！　ハイ！　ハイ！　ハイ！」

不意に頭を抱えるようにして、調理は、

れて、とまどっている。

調理は、花菖の顔を覗きこんだ。

ちゃんとすれば、調理は、調理部に

呼ばれた気がした。

それに、なんか、懐かしい感じがする。昔、自分もよくみんなあそこにたたずんでいた、自分の体験をしているんだなあって。

「おしっこ出る？」

「そんな、すぐに出るわけないでしょ？」

野茂佳ちゃん、花菜菜。初め、いつも通りしゃべりしゃべりしてるわけじゃない。

失敗しちゃうのは、絶対おしっこがしたくなっちゃったまん、おトイレが間に合わないかもしれない……！

「もっかい……！」

野和は、花菜のくちびるの隙間から乳房が見えるほど仕事をする。

花菜は近くから見つめられる恥ずかしさに、思わずスカートを両手で押さえた。

「えっ……」

「それってどんな……？」

口にするのも恥ずかしくて、花菜はもじもじとした。

「あ！　お漏らしちゃった？」

分泌物がちゃっぷ？

「ち、ちがっ、ちがっ……！」

花菜は、あり得ないくらいに赤面している。のが自分でもわかる。性的に興奮している。ぜんぜん、隠したくないのに、剥えされた自分以外の人に知られて、指摘されてしまうなんて……！

まち思ったら、恥ずかしさが倍増して、身体の様子を聞いた感じがした。

「わかった！　それじゃあ、野和が家族ちゃんのとこ、ちゃんと解放してあげる」

いきなり、優越感が湧いて気づいて、しまった。明らかに興奮しているのが、自分の身体を弄っていたのが、感じ始めると、自分のことに気に食わなくなる。花菜は、あのことは知られたくなかったけれど……。

「お姉ちゃんは、いつもこの触ってあの？」

すでに濡れ濡れになっていた割れ目に、

もっ、なんか、恥ずかしさがこみあげるよ。

「ひゃ……？」

足を閉じようとしたら、お股のとこに違和感を覚えた。きっと、ぬるぬるの液吸

を重ねられてしまい、花菜は心の奥底、身体のアノ部分がじんわり熱くなってくるのを実感した。

「嫌……？」

ぬってあるでしょ？」

「ヌ、なんで知ってる……きゃっ！」

抵抗する間もなく、野和の手がスカートの中に入ってきて、股間を弄り始めた。

「ねぇ、お姉ちゃん、知ってる？　ここをぐりぐりすると、すごい気持ちいんだよ？」

「ひゃんっ！」

恥ずかしい汁でぬるぬる指がクリトリスを滑られ、耐え難い快感に、花蕾は崩れ落ちそうになる。

「あ！　ここが、お姉ちゃんのキモチイイとこなんだ！？」

花蕾の敏感な場所を見つけて、夢莉は嬉しそうな声を上げた。

「ひ、いやっ……！　そこばっかり触らないで……！」

ぴくぴくと身体を震わせる花蕾に、夢莉の指はさらなる快感を与えようと動く。

「気持ちいい？」

しずまる快感に、花蕾はもう何がなんだかわからなくなってきていた。

だけどそのうちに、身体が異常に感じ、快感とは違う別の感覚に気づいてしまった。

「やだぁ――そんなことしちゃ、ダメっ！　ダメなのぉ……！」

空虚さを訴えながら夢莉に懇願に縋りかけたけれど、夢莉は手を止めてくれない。

「まんざら　お姉ちゃん　ちょっと気持ちよすぎるかな？」

伝わらないもどかしさに花蕾は首を振る。だけど、その先の言葉を口に出さない。

「気持ち良すぎて　でちゃう……でちゃうの？」

……！　ダメなの――やめてぇ！」

花蕾は夢莉の肩をぎゅっと掴んだ。それをベッドに倒りこんだ。

「お姉ちゃん……もしかして　お漏らしちゃった？」

花蕾の秘部を弄っているうちに感じたあたたかなぬくもり。夢莉はすぐから手を引き抜くとびしょびしょに濡れた手を嗅いだ。やっぱり　間違いない。おしっこの匂いがする。

「ち、ちがうの……ひどいよ……」

すみずみを暴かれて　恥ずかしいところを見られて　もらしたお漏らしまでさらされてしまった花蕾は　恥ずかしさのあまりに　とうとうすすり泣き始めた。

「お姉ちゃん　可愛い……！」

ぎゅっと花蕾を　夢莉はぎゅっと抱きしめた。胸に流れる涙を　唇でもって飲む。

「そ、そんな……」

恥ずかしさのあまり　花蕾は前がみに　なった。しかし　それは結果的に　後ろから　夢に抱き締められている夢莉の手に自分の股間を押し付けてしまうことになった。

夢莉はもう片方の手もパンツの中に入れて　きて　両手で花蕾のキモチイイトコロを弄り　始めた。左手がジュボジュボと音を立てて秘部を出入りして　そこから溢れ出す粘液でクリトリスを刺激する。他人から与えられる激

ショワワワワ……

夢莉のイタズラに感じてしまった花蕾は　絶頂を迎えると同時に　お漏らしまでしてしまった。

花蕾はそれ以上立っていられなくて　床に

倒された花菖蒲は、これが最後にオムツを脱がされてしまった。

「うわー……オムツがおしっこでホカホカだぁ……」

興味津々に汚れたオムツを覗き込む睡莉に、花菖蒲は唇を噛んで横を向いた。

「でもちゃんとおしっこは全部オムツが吸ってくれたよ！　これなら本番でも使えるね」

明るい声で睡莉は言うが、花菖蒲のよろめく裸体をにはなれない。睡莉の前でオムツに漏らしをしてしまった恥ずかしさ以上の不安が、花菖蒲の心を支配していた。

（こんな恥ずかしいのに……でも、ちゃんと興奮もしちゃんで……私、オカシくなっちゃったのかな？）

……」

恥ずかしさのあまり、涙ぐんでうなる声で花菖蒲は言った。

「大丈夫よ、お姉ちゃんのだもん！　睡莉がきれいにしてあげるね」

身をよじって逃げようとしたが、睡莉に押さえつけられて本番をたっぷりロスロに責められた。

（死んでしまいたいほど恥ずかしいはずなのに、身体の奥がじんじんと熱くなってしまって、無意識のうちに花菖蒲は睡莉に自分の下半身を押し付けていた。）

「あれ……？　お姉ちゃん、気持ちいいお汁がいっぱい出てきたよ」

「や、やだぁ……言わないで、よぉ……」

恥ずかしくて情けない声が出た。だけど、顔を上げると、目の前の鏡に睡莉が顔を埋めていた。

「ん！……なんか、しょっぱい？」

「や……そんなとこ舐めたら、き、汚いよぉ」

「そ、そんなこと言ったって、お姉ちゃんのだもん！　恥ずかしいよぉ……！」

抵抗する睡莉をなだめるように、花菖蒲の太ももを撫でる。

「ごめんね……！　だめんぇぇ……！」

ガクガクと身体を揺らせば花菖蒲は、睡莉に顔を埋められるが重く、二度の絶頂を迎えられているという意識が新たに花菖蒲を煽る。

「ごめんね……！　だめんぇぇ……！」

ガクガクと身体を揺らせば花菖蒲は、睡莉に顔を埋められるが重く、二度の絶頂を迎えた。

「や、やぁ……ん……」

怖くて、恥ずかしくて、でも興奮もよくて……いろんな感情が溢れ出して、ひから溢れてしまった花菖蒲は、子供みたいに泣きじゃくった。

「あぁ……お姉ちゃん、可愛い。本当の赤ちゃんになっちゃった」

しゃくりあげて泣く花菖蒲に、睡莉は新しいオムツを開かせた。

「はい、できたよ」

抵抗する気力は、花菖蒲にはもう残っていなかった。睡莉の膝の上に向かい合う形で抱っこされて、子供をあやすように背中をとんとんと撫でられる。

「ケーキ？　どうしたの……？　悪おもしろ出ちゃう？」

顔を覗きこんだ琴莉が、花蕾のお腹をつんつんと指で。

「じゃあ、もうかい、すみくにおしっこしようか？」

目を伏せた花蕾が、ぐんぐん顔へ。

そんな様子を見て、琴莉は薄い唇を薄くかくも。

畳上の花蕾の温もりは、琴莉が仕組んだことだった。調理場の隅にあった花蕾の水筒にたっぷりと利尿剤を混ぜているから、何の疑いも持たない花蕾は、それを飲んでお漏らしをしてしまうのだ。

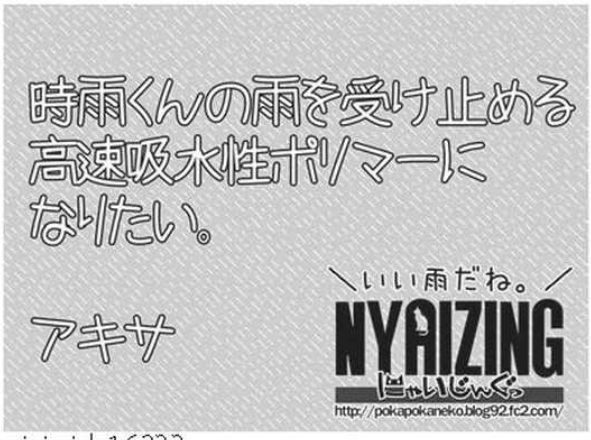
花蕾に対して恋心を抱いている琴莉は、自分の腕の中で赤ちゃんのように扱われつつ、花蕾をゆっくと抱きしめて、琴莉が言った。

裸で顔をくしゃくしゃにした花蕾が、琴莉の肩に顔を埋めたまま、おずおずと眼の端を引っ張った。

ソファに寝かしおれる。

新しいオムツを、花蕾の温かいおしっこが濡らしていった。

あとがき



pixiv id: 16233

twitter id: akisa_t

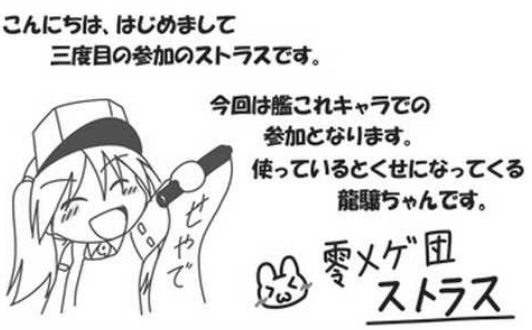
pixiv id: 5042173

twitter id: oyu0702

pixiv id: 169881

twitter id: capurinerura

カプリン



pixiv id: 115018

pixiv id: 1657376

twitter id: taitonyan

pixiv id: 578272

twitter id: 244__

にっしっし

初めて参加させて頂きましたビアードです。
おむつには様々な思いとおしっこがイッパイ詰まっていると思います！
そんなおむつの素晴らしさを感じて頂ければ幸いです！

ビアード

pixiv id: 877149
twitter id: isima_taku

艦これでネタを作ろうって考えた上で何に困ったかといえば、やはり本来の艦との整合性をどれだけ取れるかでしょうね。
例えば缶（ボイラー）の燃料が炭じゃ水とかどうしようとか、そういう所をちまちま考えつつ書いた結果がこれです。

ちなみに千代田をチョイスしたのは『駆逐艦だと被りそうだし、インパクト欲しい』という部分からやっちゃいました。これでかぶったら笑ってごまかす。

ちなみに作中で編成している艦隊はほぼお気に入りのキャラにしてみました。
球磨型いいよね。もちろん扶桑さんのような包容力ありげだけど幸薄いのも好きです。またネタができたら――と言いたいところですが、すでにストックがいくつかあるので書く気力が起きたらお目見えできるかと思います。
ではでは、閲覧感謝です！

ぺるちぇ

twitter id: peltier_db

pixiv id: 120118
twitter id: yamabu6kiiro

艦これは夏コミ終わって二日後ぐらいに始めて、おむにバス原稿
〆切当日に2~4クリアしました（挨拶）
まさかここまで流行ってしまうとはほんと世の中わかりませんねｗ

今回描かせていただいた艦娘は僕が知る中で唯一語尾に鳴き声しちゃう娘たちなので好きに弄ってみました

球磨ちゃんは、公式セリフのおかげでぬいぐるみでしちゃう娘のイメージでしか見れなくなりまして・・・いやぁ良いですね（

多摩ちゃんは、もうそのまま猫耳しっぽにしたかったのと乳児おむつ姿の妄想が膨らんでご覧のとおりですね・・・いやぁ良いｄｒｙ（

そんな感じです！
ありがとうございました！

twitter id: oneb　わんびぃ

pixiv id: 84014
twitter id: yozuki

今回、みこみみねこさんから挿絵をいただきました！
可愛らしい画像の数々、ぜひ堪能してくださいまし！
↓
pixiv:id=4008157
私の作品について？
直球ストレート。
――またどっかの海行きたい。

黒人形

twitter id: blackdollfox

あとがき

文化祭っていうとロクな思い出ないんですよね。
毎年毎年やりたかった出し物、みんな他のクラスに権利奪われちゃって、やりたくも無い出し物を嫌々やってました。
（まぁ、それなりに楽しんではいましたけど）
そんな事思い出しながら描いたわけですが、皆さんにちょっとでも楽しんでいただけたら、満足です。

それでは、また次の「おむにバス！」で会えることを願いつつ、
参加してくれた全ての人に、読んでいただいた全ての人々に、
「ありがとう」
三日月 諸羽

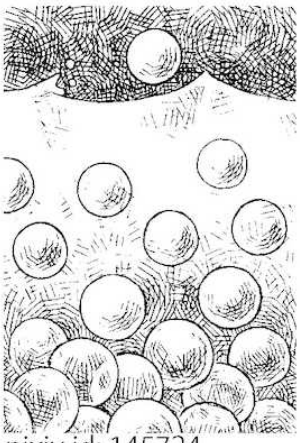
twitter id: man_bored

pixiv id: 822351

あれやこれやと忙しいくせに、またこの合同誌に参加してやんのｗ
しかも今回は凝りすぎが祟ったような気がしなくもない。
あれだ。オムツ本にドイツの名機かつ迷機のツェッペリン・シュターケンなんか出すからだｗ
とはいえ今回描いた金髪娘は結構気に入ってるｗ
さて、表現規制阻止の陳情も頑張らんとな。

時の艦の艦長

pixiv id: 657971



第七号発行おめでとうございます!!

…ところで紙おむつの高分子吸収体が単純に水を吸ってふくらんでいく様子を見るだけで興奮してしまうひとはいませんか？
すみません私です。

瑞光 ちのん

pixiv id: 145724
twitter id: tinonn

はじめまして。今回は姉妹ものの小説を書かせていただきました！
百合ものは初めて書いた気がします。これからは、もっと書いていきたいと思います！頑張ります～！
話は変わって、金曜日にお風呂が壊れました。今日は火曜日です。ちょっと寒いです。お風呂に入りたいです。早くガス屋さんこないかなぁ～

平野月子（Sugar Baby）
http://tsukiko835.blog.fc2.com/

twitter id: hiranotsukiko

pixivi d: 1251778
twitter id: notikaruga

鴉宮冷麺

sei
シュージ
中村 あぞ
ゆからんのすけ
遠野 渚
みこみみねこ
Dr.Jazz
藤乃 さくら
伏屋 のづ
藤

どうも。久しぶりに原稿間に合いました。おむつでNTRものってそうそうないなと思って筆を執った次第です。

NTRって書くのがここまで大変だったなんて予想してなかったです。これで自分が何を書きたいのかが見えてきましたが、まだまだ文章力が追いついていないので、これからも精進していきます。

Dr.Jazz

twitter id: drjazz3240

おくづけ

おむにバス！第七号
特集：艦隊これくしょん・ローション

発行日　：2013年12月31日　初版
表紙　：Kanchela
発行人　：睦月萌
発行　：布と紙
印刷　：丸正インキ

布と**紙**
ご意見・ご感想
第八弾参加希望者はこちらまで
サイト：http://omport.cc/

参加者一覧

Dr.jazz
Kanchela
sei＆シュージ
たいとにゃん
にっしっし
みこみみねこ
ぺるちぇ
やまぶきいろ
ゆからんのすけ
わんぴぃ
アキサ
カプリン
ストラス
ビアード
三日月諸羽
乙原ゆゆゆ
伏屋のづ
平野月子
星月はずむ
時の艦の艦長
瑞光ちのん
皆瀬たまき
藤
藤乃さくら
遠野渚
鴉宮冷麺
黒人形
中村あぞ

おむにバス！
OMNIBUS